

●モノグラフ

小学生ナウ

Vol. 13-1

日本のお母さん

目 次

現代の母親たちの意識……深谷昌志	2
〔調査レポート〕 日本のお母さん	9
要約	10
はじめに	14
1. 全国調査の概要	15
●調査方法	15
●サンプル校について	16
●母親の属性について	19
2. 現代の母親のライフスタイル	21
●変わっていない母親の生活スタイル	21
●昔風の「つくし型」の母親たち	24
●仕事と家事の両立をはかる母親	27
3. 家族との関わり	31
●みんなで決める	31
●緊急の場合に協力する父親	33
●子どもとの関わりを大切にする母親	34
●気がついてくれない母親	36
●意外ときびしい母親のしつけ	38
●両親との同一視	40
●安定している母親像	43
4. 今日的な母親像を追って	44
●子どもから好かれる母親のタイプ	44
●家族の世話をまめにする中で	47
●生活を楽しむ母親	52
●「つくす母親」と「楽しむ母親」の両立	57
まとめに代えて——「シフト型」の母親のライフスタイル——	60
〔対談〕 現代子育て考……牧野カツコ vs 深谷昌志	61
資料1 調査票見本	69
資料2 基礎集計表	79
資料3 調査票見本および集計結果（学校用）	87

*おことわり：本文中に使用した写真は、本文・テーマとはいっさい関係ありません。

現代の母親たちの意識

静岡大学教授

深谷昌志

8割が退職

小中学生を持つ母親についての調査を行う機会があった。その際、母親たちがどういう形で子育てを始めたのかを尋ねてみた。

まず、出産前後と仕事との関係を確認してみると、以下ようになる。

1. 結婚で仕事をやめた	24.3%	} 54.8%
2. 出産で仕事をやめた	30.5%	
3. 出産後も勤めた	14.7%	
4. 自営の手伝い	11.0%	
5. 仕事につかなかった	10.8%	
6. その他	8.7%	

54.8%、つまり半数以上の女性が結婚と出産を契機に退職している。しかし厳密に考えると、「全体」の中に「仕事につかなかった」や「自営の手伝い」が含まれているので、それらを除外すると、仕事をしていた女性は69.5%、そのうち、やめた者が54.8%なので、退職率は78.8%となる。

もちろん、母親たちは「子どもが生まれたら、やめようと思っていた」(19.8%)、「子どもが生まれたら育児に専念するのが当然だと考えた」(15.5%)と答えており、必ずし

も不本意な退職と限らないが、それでも「両立がむずかしかった」(10.9%)、「子どもを頼める人がいなかった」(5.2%)、「夫の希望で」(4.5%)などが、かなりの割合を占める。したがって、仕事を続けたくともやめざるをえなかった女性たちが多いのであろう。

欧米などでは、出産後も仕事を持つ女性が増加している。出産後に退職し、育児の期間を経て、また仕事につくというM字型の就労形態は日本に固有なものだが、日本の場合にしても条件が整っていれば、仕事を持ちつつ育児もしたいと考えている女性は少なくないのであろう。

ヒトの子は生理的な未熟児として産まれてくるといわれる。「ツのつくうちは神の子」という江戸時代の子育て観のように、子どもはヒトツ、フタツ、ミツツ…ココノツと、数えの9歳までは手がかかるから、神さまから授かった子宝を大事に育てたのも、そうした感じ方を示すものであろう。

乳児の頃、母親の病気、あるいは子どもサイドの病気、そしてさまざまな理由によって母と子とが分離して生活する。そうすると、乳児の心身両面の成長が阻害されることは

マターナル・デプリベーション (Maternal Deprivation) として知られる。

乳児はむろんのこと、幼児も母親の保護がなければ成長できない。そうした面をとらえ、小児医の中に母乳の必要性を説くだけでなく、母と子とのふれ合いの大事さを指摘する人たちが少なくない。

こうした観点を延長していくと、母親は家庭で子育てをしてほしいという論議になりがちだ。しかし、多くの母親が仕事をしつつ育児もしたいと願うのは当然であろうし、実際に欧米の母親がそうした生き方をしているのはすでにふれた通りである。とはいっても、生物としての乳児が母親でなくとも、誰かの保護——しかも一定期間、安定した——が不可欠なのは否定しにくい。

これだけ豊かな情報化社会に、乳児が今も昔も変わることなく産まれてくる。乳児をとりまく環境と乳児自身の生理的な成熟とのギャップが、母性についてのむずかしい問題を引き起こしている。

母親としての配慮

そして、現在までの日本の母親たちが、子どもを大事にする形での生活設計を選択しているのはすでにふれた通りである。

幼児の頃、子どもとどう接し方をしたかについて、母親たちは以下のように答えている。

	とても+かなり=小計
子どもと外で遊んだ	26.3% + 36.3% = 62.6%
公園で遊ばせた	23.9% + 30.6% = 54.5%
絵本を読んだ	20.4% + 28.9% = 49.3%
子どもを外へ連れていった	16.8% + 25.2% = 42.0%
子どもと室内で遊んだ	13.2% + 27.5% = 40.7%

母親として、幼い子どもときめ細かく接してきた。そうしたきめの細やかさは現在も続いている。

子どもが戻る頃必ず家にいるようにしている	いつも 25.4%	} 53.7%
	かなり 28.3%	
	やや 22.7%	} 23.6%
	あまり 14.7%	
	まったく 8.9%	

半数を超える母親が子どもが戻る頃、家にいるようにしているという。母親たちの31.1%は専業主婦、これにパートの30.8%、自営の13.5%を加えると、75.4%は子どもが帰宅する頃、在宅しやすい状況下にある。というより、母親たちはそうした条件を作れるように生活設計を行ってきたのであろう。

たしかに母親たちは、「子どもはうまく育ったか」に表1のように、「友だちづきあい」や「体力」、そして「協調性」などについて「とてもうまく育った」と言えないまでも、「かなり」「まあ」うまく育ったと答えている。そうした意味では、仕事を断念して子育てに専念してきた母親たちの努力が、それなりに実を結んで、子どもがすこやかに育ってきたのであろう。

なお、今回の調査の母親たちの54.4%は2人の子持ちだった。しかし母親たちの61.9%は、「理想とする子どもの数」は3人と答えている。したがって、本来なら子どもがもう1人欲しかったのであろう。それなのに、どうして子どもを2人ととどめたのか。子どもをそれ以上産まなかった理由として、第一に「現在以上欲しくなかった」をあげ、次に「そのときは十分だと思った」。さらに、「経済的に無理だった」と答えている。それなりによく理解できる事情だが、その結果が二人っ子となったのであろう。

それでは、子どもたちがこれから先、どのように成長していくと母親は思っているのだろうか。

母親たちの56.5%は大学、そして短大の12.8%を含めると69.3%が、難易度はともあれ、高等教育をわが子に受けさせようとしている。

そして子どもたちの未来像として、「個性的な生き方」(17.4%「とてもそう思う」)や「社会的なリーダー」(11.4%)は無理とし

ても、「家庭を大事にする人」(53.6%)や「すべてにがんばる人」(36.8%)になってほしいという。

したがって、母親たちは高望みをするというより、人並みの幸せを子どもに託しているように見える。

なお母親のうち、「まったく」の16.2%と「あまり」の59.1%を含めて75.3%、つまり4分の3が、子どもとの同居を考えて「いない」と答えている。そして「老後の経済」についても、「子どもの世話になるつもりはない」が71.5%に達する。

したがって、現代の母親たちは子どもをあてにして老後を送るより、自分たちの力でなんとか自立していきたいと考えている。とな

ると、母親たちはどういふつもりで子育てをしてきたのか。

母親たちは、子育てのメリットとして、図1のように答えている。「子どもがいたお陰で泣いたり笑ったりできた」し、「家族の絆ができた」ような気がする。古めかしい言い方だが、昔も今も子どもはかすがいなのであろうか。

このように現代の母親たちは、2人の子を大事に育ててきた。そして、子どもはすこやかに育ちつつある。子どもの将来に、それほど大きな期待をかけるつもりはないし、老後も子どもの世話になり、子どもに頼りきるといふ気持ちもない。楽しみながら子育てをしてきたという感じである。

表1 子どもはうまく育ったか

(%)

	とても うまく育った	かなり うまく育った	まあ うまく育った	あまり 育たなかった	全然 育たなかった
友だちづきあい	17.7	33.2	44.1	4.9	0.2
体 力	15.0	28.3	45.0	10.9	0.8
協調性	14.2	30.8	45.7	8.3	1.0
生活習慣	7.9	22.0	56.6	12.6	0.8
やる気	7.1	20.9	50.0	20.4	1.5
学業成績	4.2	15.5	54.7	22.9	2.7

○は最大値

子どもの数と母親らしさ

現代では、2人きょうだいの家庭が増加している。それが1.53ショックのような少子化傾向を招いたのであろうが、それではきょうだいの数が少ないことは、子どもにとってどのような利点や不利益をもたらすと、母親たちは思っているのだろうか。

きょうだいの少ないことのメリット

1. 母親の目が行き届く (40.6%)
2. 好きなことをさせられる (37.0%)
3. 教育にお金をかけられる (31.6%)

きょうだいの少ないことのデメリット

1. おとなになってから淋しい (62.1%)
2. 1人であるときが多く、淋しい思いをする (66.7%)
3. 過保護になりやすい (65.5%)

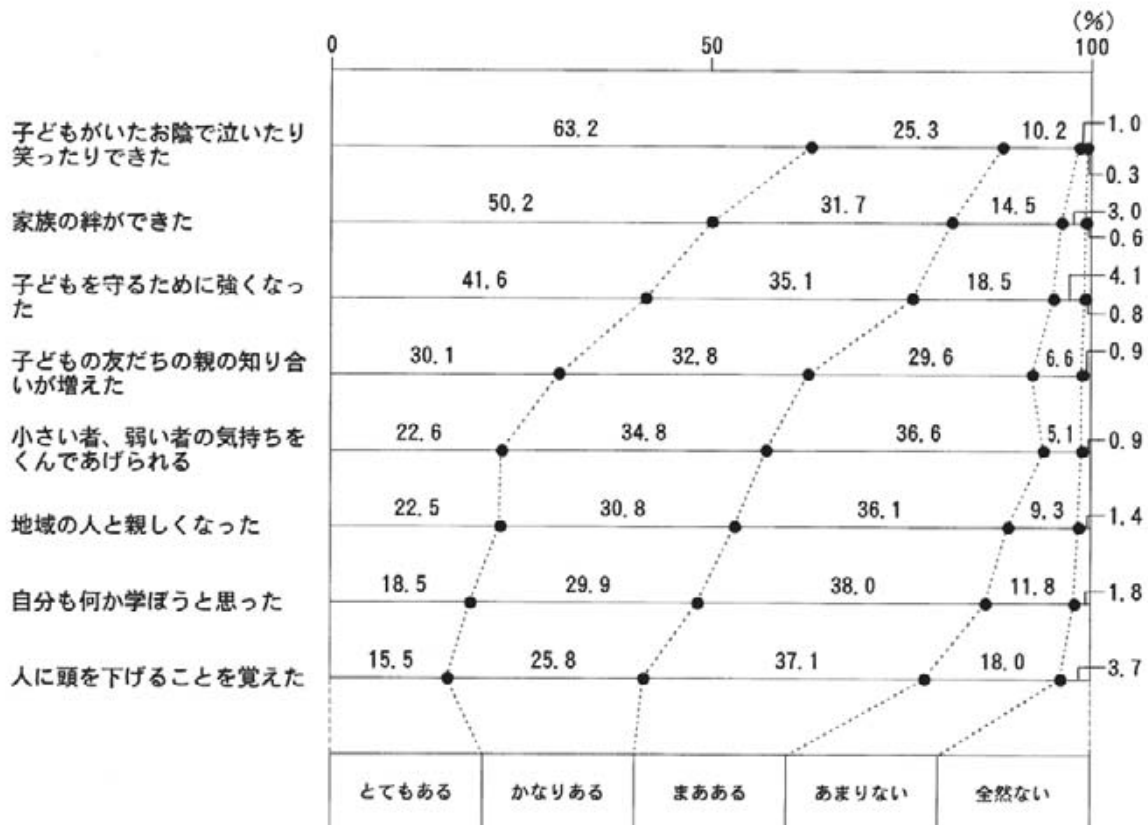
(「とても」「かなり」そう思う場合)

子どもに目が行き届くというのが利点だが、きょうだいが少ないと過保護になりやすく、おとなになってから淋しい思いをするので、デメリットのほうが多いという見方もある。

母親の中には、一人っ子の母親もいれば、3人以上の子持ちの母親もいる。

そうした子どもの数は、母親の意識にどの

図1 子育てのメリット



ような影響を与えているのか。まず、現在の
幸せ感を調べると、以下のような数値となる。

子どもが 1人 2人 3人 4人
52.5% < 61.3% < 63.5% < 71.1%
(「とても」「かなり」幸せの割合)

理由はともあれ、子どもの数の多い母親の
ほうが幸せを感じている割合が高い。

なんとなく理解できる感じだが、もっとも
「疲れやすい」(一人っ子の母=17.6%、3
人の母=22.4%)、あるいは、「家事が繁雑に
なった」(11.1%と23.9%)など、3人の子
持ちとなると、何かと多忙のように思われる。

しかし表2に示す通り、子どもの数の多い
母親のほうが子育てを通して知り合いが増え、
自分自身も成長し、家族の絆が強まり、楽し
い人生を送っていると、子どもの多さを高く
評価している。

それに対し、一人っ子の母親は、1人の子
を大事に育てている感じがするが、そうした
傾向は以下のような数値となってあらわれて
いる。

	1人	2人	3人
子どもと一緒に外 で遊ぶ	29.9%	>27.1%	>24.0%
絵本や物語を読む	27.8%	>20.7%	>19.1%
習い事に行かせる	12.1%	>10.3%	>7.3%

1人の子の親が一人っ子をきめ細やかな態
度で育てようとする姿がここから浮かんでく
るが、それでは一般的にきょうだいの多さ、

少なさを母親たちはどう感じているのだろう
か。

〈きょうだいの少ないことのメリット〉

	1人	2人	3人
母親の目が行き届く	19.3%	>11.5%	14.8%
好きなことをさせ てもらえる	15.8%	>9.2%	14.1%

〈きょうだいの少ないことのデメリット〉

	1人	2人	3人
1人のとき淋しい 思いをする	28.9%	<29.8%	<42.0%
過保護になりやすい	14.8%	<29.5%	<38.2%

(「とてもそう思う」割合)

つまり、子どもの数の多い母親はきょうだ
いのいないことが淋しさや過保護を招くと
思っているのに対し、一人っ子の母親は、そ
うかもしれないが目が行き届き、子育てに十
分な費用をかけられるなどを、きょうだいの
少ないことのメリットとしている。

きょうだいの多い子はきょうだいにもまれ
ながら、のびのびと育つのに対し、一人っ子
は親たちに目をかけてもらいながら、きちん
と育つというのが、母親の目からみた子ども
の数の意味なのであろう。

いずれにせよ、こうした気持ちを抱いて、
現代の母親たちは毎日の生活を送っているの
であろうが、以下、全国調査の形でもう少し
マクロな面から、母親の姿を探っていくこと
にしたい。

表2 子育てのメリット × 子どもの数

(%)

	全 体	1 人	2 人	3 人	4 人
子どもがいたお陰で泣いたり笑ったりできた	88.5	86.5	88.2	89.5	88.8
家族の絆ができた	81.9	71.0	82.8	83.5	83.3
子どもを守るために強くなった	76.7	73.7	75.6	78.9	80.7
子どもの友だちの親の知り合いが増えた	62.9	55.9	63.0	64.4	64.6
小さい者、弱い者の気持ちをくんであげられる	57.4	54.5	56.1	60.8	54.9
地域の人と親しくなった	53.3	37.5	52.5	57.9	54.8
自分も何か学ぼうと思った	48.4	47.2	46.8	51.3	47.4
人に頭を下げることを覚えた	41.3	38.6	39.7	44.7	39.8

「とても+かなりある」の割合 ○ は最大値

〔調査レポート〕

日本のお母さん

東京学芸大学教授	深谷和子
千葉市立都賀小学校教諭	広森 滋
江戸川区教育研究所教育相談員	中原美恵
船橋市立栗円台小学校教諭	新井 誠
千葉県立佐倉高等学校教諭	畠山 滋
文教大学女子短期大学部助教授	石川洋子
東京学芸大学講師	田村 毅



調査レポート

日本のお母さん

要約

1. 本調査は全国の小学校を50分の1で抽出し「5年1組」を対象に行われた全国調査の結果であり、72校2,149人(男子1,089人、女子1,060人)がサンプルとなっている。(表1)

2. 社会の生活スタイルが変わってきているのに、母親の生活スタイルはあまり変わっていない。(図10～図16)

「お年寄りを大切にする」「みんなのご飯をよそう」など、昔風の家族につくす母親「つくし型」の行動様式が残っている。(図17)



3. 「友だちがたくさんいる」「長電話をする」など、ある程度は「自分の生活を楽しむ」タイプもみられる。(図18)

外に出て遊ぶ母親は少数派である。(図19)



4. 本サンプルは4分の3が働いているが、種々の面で仕事と家庭の両立を図ろうとする姿勢が強い。(図20～図26)

5. 本調査でみる限り、世間で言われるほど母親が強く、家庭内地位が高くなっている様子はみられない。(図28・図29)



6. 父親は、母親が病気の時はいつもより早く帰って家事に協力する姿もみられるが、母親の帰りが遅いときでは、それほど協力的でない。(図30)

7. 授業参観、PTA、子どもの勉強をみるなど、もっぱら母親が担っている(図32)。また母親は子どものことを気にかけてはいるが、その関心は主に学校や勉強に関したことに向けられている。(図33)



8. 父親と母親の吐り方はほとんど一致しており、両親の同質化傾向が表れている。(図38)

9. 女子は男子より母親のことをよく知っており(図40)、母親との同一視が高い。(図44)

10. 子どもの目からは母親は幸せであり(図41)、ほとんどが母親を好き(図42)と答えている。

調査レポート／日本のお母さん

要約

11. 子どもが好きで友人に自慢できるタイプの母親は、家族より早く起き、子どもが家に帰るといってくれるなど「つくし型」の母親である。(図47・図48・表5)

12. しかし「つくし型」のタイプの母親も、それなりに家の外に出るなど、行動半径の広がりを持っている。(表6)

13. 家族より自分の生活にウエイトを置き、生活を楽しむタイプの(現代的な)母親は、数においてはまだ少数派である(図18)が、こうしたタイプの母親は行動半径が広いだけでなく(図52)、子どもたちから評価もされており(表7)、家族にも(「つくし型」ほどではないが)つくしている。(図53)



●調査概要

1. 調査主題 日本のお母さん

2. 調査視点 現在、子ども問題の議論がなされる際、母親の在り方に非難が集中することが多いが、本当に母親は母親としての

役割を失いつつあるのか。父親に続き母親の全国調査を行い、現代の母親像を探る。

3. 調査項目 母親の仕事、毎日の生活、母親専用品の有無、家族の中の決定権、母親について自慢できること、母親の行動半径、父親との協力体制、母親の幸せ度、など。

14. 「つくし型」の母親は年齢に関係なく、どの世代にも一定の割合で見られるが、生活を「楽しむ型」の母親は、若い年齢層に多い（表8）。職業との関わりでは、専業主婦、パートタイマー、内職などの子どものそばにいる母親に「つくし型」が多く、フルタイムとパートタイムで働く母親に、生活を楽しむタイプの母親が多くみられる（表9）。「つくし型」の母親も生活を「楽しむ型」の母親にも、夫の家事や育児協力が、そうでない母親の場合より得られている（表11）。どちらのタイプにせよ、家庭がうまくいっているのであろう。



15. まとめ

現代的な父親のタイプとして、われわれはすでに「マルチ・ロール型」（父親役割と母親役割を兼用する）を見いだしたが、現代的な母親のタイプとしては「シフト型」（「つくし型」から出発し、子どもの成長と共に次第に生活を「楽しむ型」へと移行していく）の母親のライフスタイルが指摘できるのではなかろうか。



うまいシフトを可能にさせるには、「生活を楽しむ」能力や技術を若いうちから持っており、それを家族や社会の支援の下でうまく生かしていくことにあるのではないかと思われる。

4. 調査時期 1992年6月

5. 調査対象 全国72校に通う小学5年生

6. 調査方法 学校通しによる質問紙調査

7. サンプル数

(人)

学年/性	男子	女子	計
5年	1,089	1,060	2,149



はじめに

昨年、われわれは全国調査に基づいた「日本のお父さん」を刊行した（小学生ナウvol. 11-12）。その中で、今日的な父親像としての「マルチ・ロール型」の父親の存在が明らかにされた。これは、かつての父親役割に加えて、母親的な役割をもこなしている新しい父親像で、子どもたちからも高く評価されていた。では、こうしたマルチタイプの父親のそばにいる母親は、どんな姿で、どんな役割をとっているのか。母親の姿にも変化が起きているのだろうか。

子ども問題の議論がなされるおりに、ともすると、母親の在り方に非難が集中することが多く、母親らしさを失ったとか、無責任で、しつけができないとかなどの指摘がなされる。しかし今日、本当に母親は母親としての役割を失いつつあるのだろうか。

本レポートは、父親調査に続いて母親の全国調査を行い、その結果を報告することにした。

1. 全国調査の概要



●調査方法)))

全国調査の方法は、全国約2万5千の小学校の50分の1にあたる500校を各県がほぼ均等になるように無作為に抽出し、調査票サンプルを送り、調査協力を依頼した。対象は各学校の5年1組とした。これは、各学級が恣意で選ばれることを防ぐと共に、1学年1クラスの小規模校でも必ず「1組」は存在することを考えてである。

その結果、表1にあるように全国72校の調

査協力を得て調査の実施に至った。調査対象は、5年生男子1,089人、女子1,060人の計2,149人であった。調査時期は1992年6月で、全て学校通しによる質問紙調査である。

なお、調査項目は主に母親に関するものであるが、項目によっては、一昨年実施した父親調査と共通のものが設定してある。それらの項目については、本レポートの中で、比較したデータを報告していきたい。

表1 各地方ごとの調査サンプル

地 方	調査校数
北海道地方	2校
東北地方	16校
関東地方	10校
中部地方	19校
近畿地方	3校
中国地方	9校
四国地方	7校
九州地方	6校
合 計	72校

●サンプル校について)))

子ども調査を行う一方で、それぞれの学校の教頭または教務主任に、学区の様子、保護者についてなどの調査を実施した（P. 87資料3）。

まず表2は、学区の地域特性をみたものである。学区の「ほとんどの地域がそう」と「そういう地域も含まれる」を加えた数値を見ると、古くからの住宅地がもっとも多く91%、以下、新興住宅地の73%、商業地域の71%と続く。

図1は、人口移動の様子から地域特性をみたものである。50%が古くからの住民が多い地域であることがわかる。逆に、新住民の多い地域は25%であった。

図2は、このような学区に住む子どもたちが通学にどのくらいの時間を要しているかをみたものである。8割近くの子どもが、学校から20分以内の所に住んでいることがわかる。

次に、学区周辺の様子をみた図3によると、公園や空き地などの子どもが遊ぶ環境よりも、おけいごとや塾が多いことが読み取れる。

さらに、保護者の教育への関心度をたずねてみると、図4が示すように、70%の学校で教育への関心が高い地域と答えられている。

最後に、保護者の学歴をたずねたものが図5である。大学卒業の多い地域は、全体の約30%にあたっていることがわかる。

表2 学区の地域性

(%)

	ほとんどの地域がそう	そういう地域も含まれる	ほとんどない	1つ代表させるならば
① 古くからの住宅地	21.2	69.7	9.1	20.0
	90.9			
② 新興住宅地	11.1	61.9	27.0	21.5
	73.0			
③ 商業地域	15.9	55.5	28.6	23.1
	71.4			
④ 農業地域	17.5	44.4	38.1	29.2
	61.9			
⑤ 団地	0.0	60.7	39.3	0.0
	60.7			
⑥ 工業地域	0.0	24.6	75.4	3.1
	24.6			
⑦ オフィス街	3.6	25.0	71.4	0.0
	28.6			
⑧ 漁業地域	3.4	6.9	89.7	3.1
	10.3			

図1 学区内の人口移動の様子

(%)

ほとんどが古くからの住民	古くからの住民がやや多い	古くからの住民と新住民が半々	新住民がやや多い	ほとんどが新住民
20.6	29.4	25.0	11.8	13.2

図2 平均的な通学時間

(%)

5分以内	約10分	15~20分	約25分	30分以上
0.0	19.1	60.3	14.7	5.9

図3 学区周辺の様子

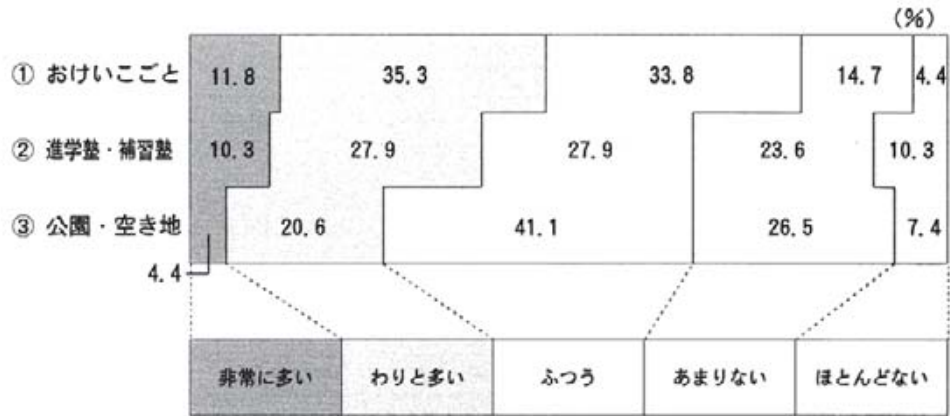


図4 保護者の教育への関心

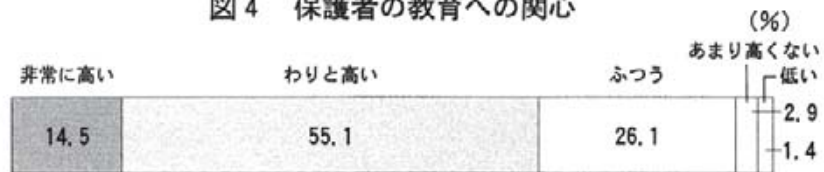
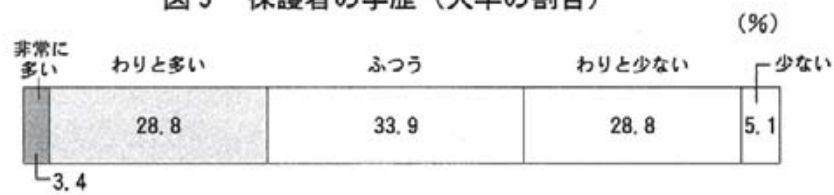


図5 保護者の学歴（大卒の割合）



●母親の属性について)))

詳しい調査報告に入る前に、子ども調査から調査対象となった母親の属性について明らかにしておきたい。

図6は母親の年齢を示したものであるが、30歳代後半と40歳代前半が中心となっている。

図7、図8、表3は家族構成をみたもので、家族の人数は4人が34%と最も多く、次いで5人の28%となる。少子社会の名の通り、兄弟の人数は、2人の51%と3人の36%で9割近くを占めてしまう。同居の家族は、母親が

99%であるのに対して、父親はそれよりやや少ない93%。単身赴任や家庭崩壊といった世相を反映しているのであろう。

また、祖父母の同居がそれぞれ24%（祖父）と34%（祖母）と高く、全国調査ならではの数値と言えよう。

図9は父親の仕事をたずねたものだが、サラリーマンが64%と断然多い。なお、母親の仕事については、次章で詳しくふれることとする。

図6 お母さんの年齢

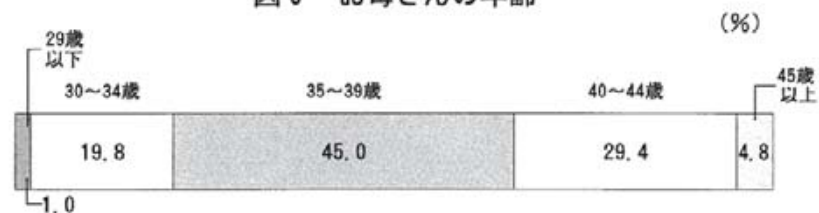


図7 家族の人数



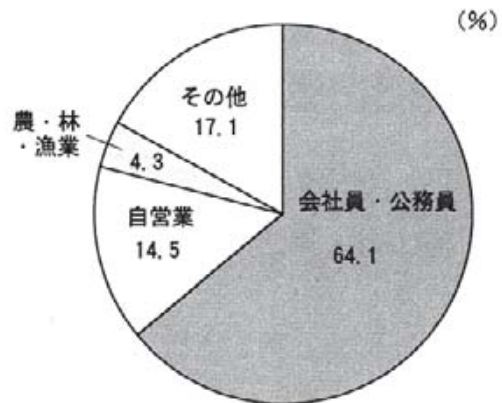
図8 兄弟の人数



表3 一緒に住んでいる家族（複数回答）

家族	お父さん	お母さん	お兄さん	お姉さん	妹	弟	おじいさん	おばあさん	その他
%	93.2	98.6	32.2	30.2	30.9	31.5	23.5	34.0	3.9

図9 お父さんの仕事



2. 現代の母親のライフスタイル



●変わっていない母親の生活スタイル))

それでは、母親の生活の様子から眺めていこう。

図10～16を見ると、社会のスタイルが大きく変わってきているのに、母親の生活スタイルがあまり変わっていないことに気がつく。図10が示すように、81%の母親が家族より早く起きているし、図11のように、72%が子どもが起きたときには身なりを整えて仕事をしている。朝食を毎朝一緒に食べている母親は54%だが（図12）、64%が子どもが学校から帰ったときに家にいる（図13）。さらに、76%と一緒に夕食を食べ（図14）、シャワーが

完備して入浴の順番がさほど意味をなさなくなっているにもかかわらず、未だに46%の母親が最後のほうで入浴している（図15）。そして、最後の図16が示すように、父親の掃りが遅ければ、57%が寝ないで待っている。

表4は、図12の朝食と図14の夕食について、母親調査と一昨年の父親調査の結果を比較したもののだが、父親に比べて母親のほうが数値が大きい。時代の流れの中で母親たちの社会進出も高まってはいるが、それでも母親は子どものそばにいて、子どもの世話をしようと努力しているのであろう。

図10 お母さんは家族より早く起きているか

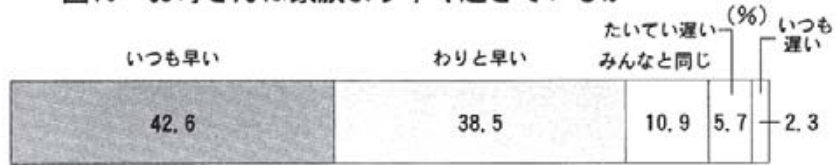


図11 あなたが朝起きたときのお母さんの様子

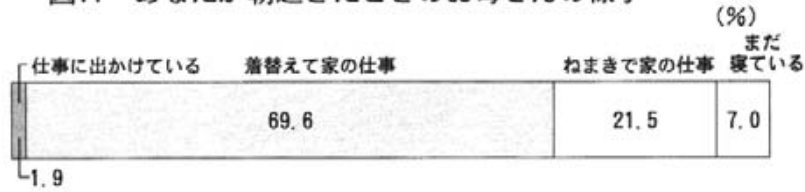


図12 お母さんと一緒に朝食をとるか

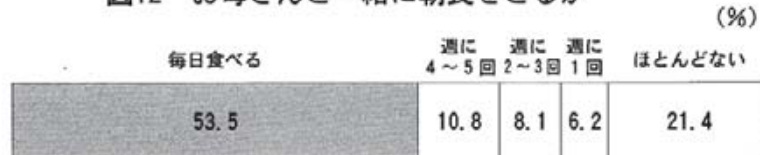


図13 学校から帰ったとき、お母さんがいるか

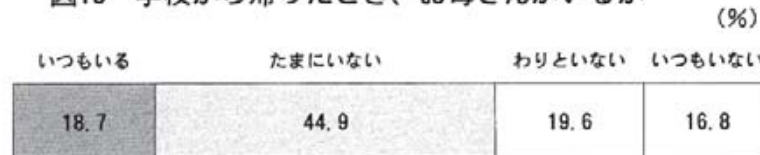


図14 お母さんと一緒に夕食をとるか

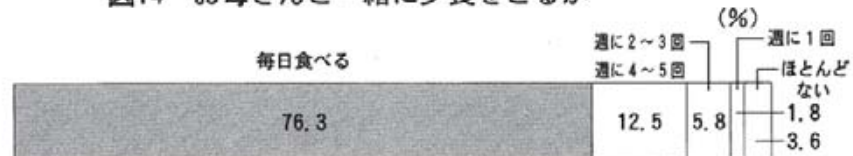


図15 お母さんのお風呂の順番

(%)				
いつも最後	たいてい遅い	決まっていない	わりと早い	いつも最初
21.7	24.2	43.4	6.7	4.0

図16 お父さんの帰りの遅いときのお母さんの様子

(%)				
いつも待っている	わりと待っている	決まっていない	たいてい寝てしまう	いつも寝てしまう
31.2	26.0	26.5	10.7	5.6

表4 一緒に食事をするか（お父さんとの比較）

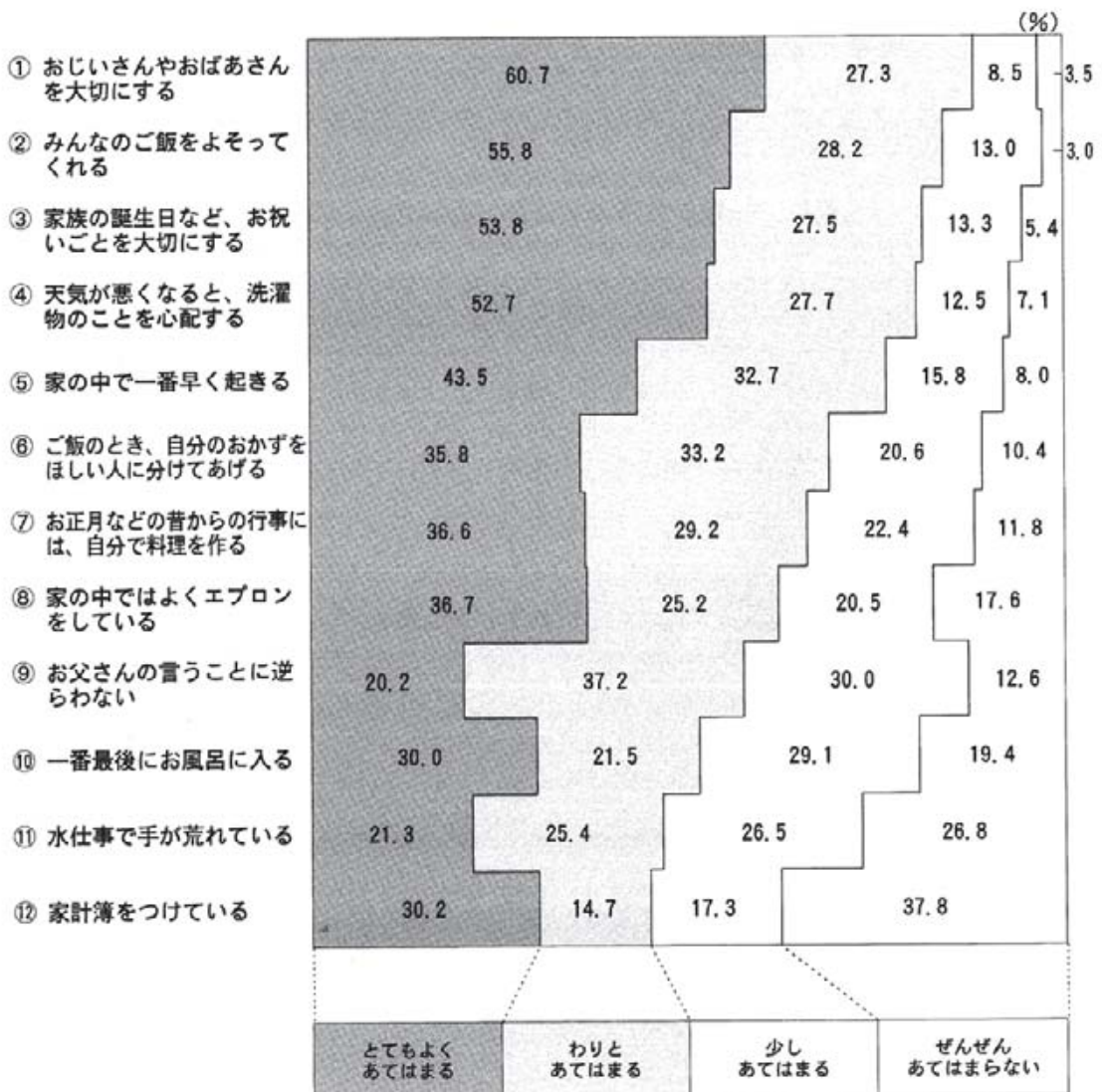
		(%)				
		毎日食べる	週に4～5回	週に2～3回	週に1回	ほとんどない
朝食	お母さん	53.5	10.8	8.1	6.2	21.4
	お父さん	31.2	16.7	15.5	12.7	23.9
夕食	お母さん	76.3	12.5	5.8	1.8	3.6
	お父さん	32.7	26.3	20.4	9.7	10.9

●昔風の「つくし型」の母親たち)))

次に、母親の行動様式について見ていきたい。
図17は昔風の「家族につくす母親」を指定して項目を設けたものである。☒は「とても

よくあてはまる」と「わりとあてはまる」の数値を加えて高い順に整理してあるが、さすがに⑩「水仕事で手が荒れている」(47%)、

図17 家族につくすお母さん

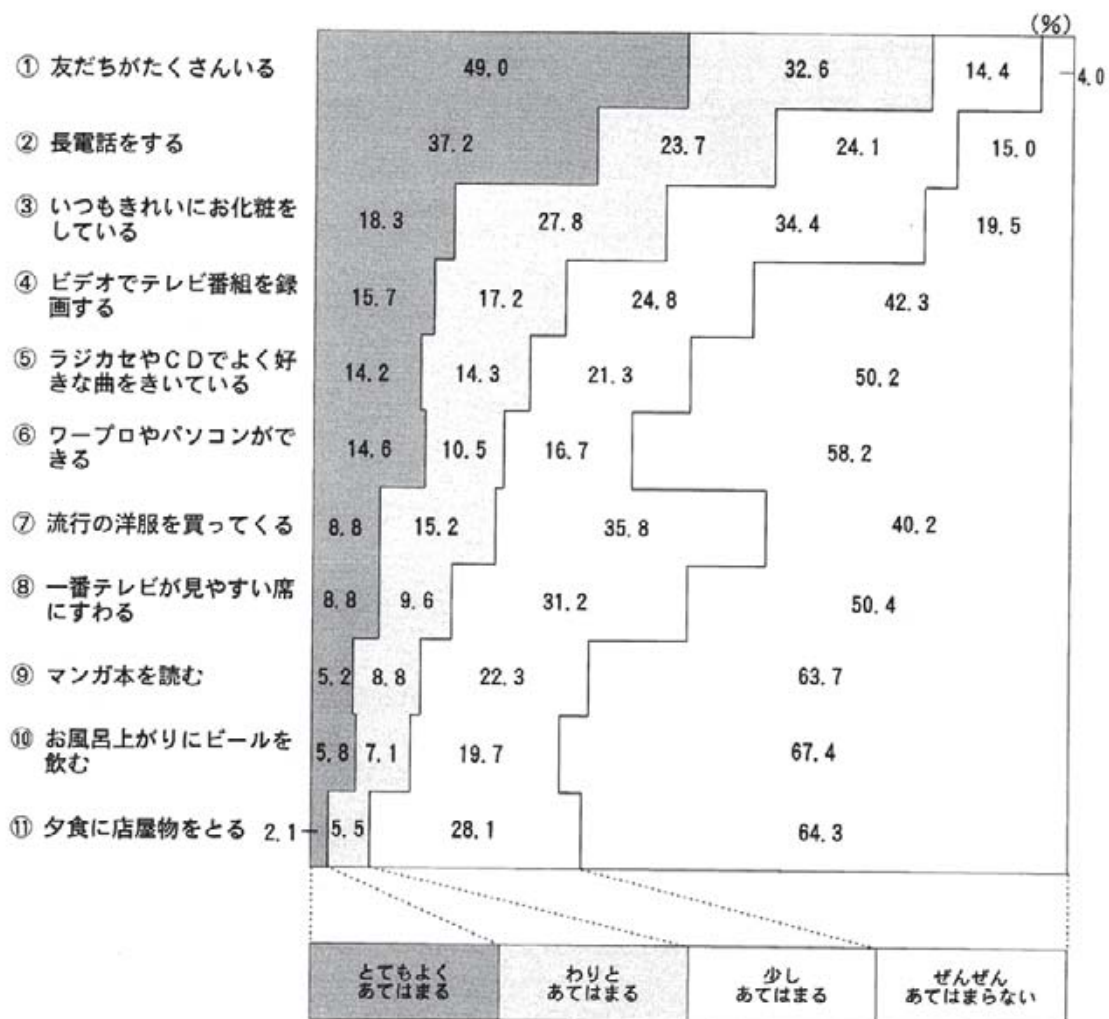


⑫「家計簿をつけている」(45%)といった昔風の母親の姿は少なくなっている。しかし①「祖父母を大切にする」が88%、以下、⑩「一番最後にお風呂に入る」までの10項目では50%を超している。これらのデータは、いわゆる昔風の「家族につくす母親」の行動様式が残っていることを示すものである。

これに対して、図18は現代的な母親のライ

フスタイルを想定し、「自分の生活にウエイトをかける母親」を指して項目を設けたものである。図17に比べて、全般的に数値は低い。それでも①「友だちがたくさんいる」が「とてもよくあてはまる」と「わりとあてはまる」を加えて82%、②「長電話をする」が61%と、交友関係の中である程度の生活を楽しむ姿がみられる。

図18 自分の生活を楽しむお母さん



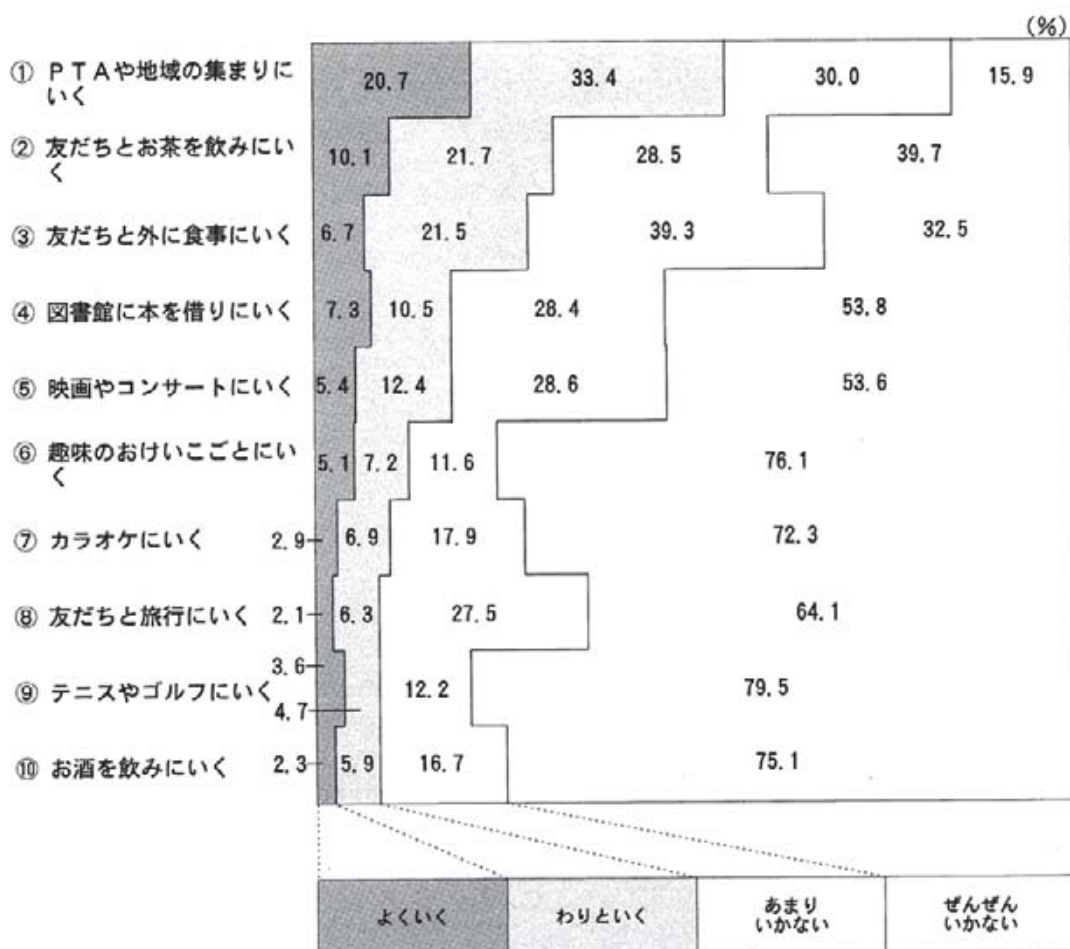
以上の図17と図18が家の中での行動様式とすれば、図19は、「家の外へ出る母親」を指定して、項目を設定したものである。

「よくいく」と「わりといく」を加えた数値に注目すると、①「PTAや地域の集まりに行く」は54%と過半数に達している。しかし、それ以外の行動様式は数値が低く、世間から「母親らしくない」などと何かと言い立

てられてもいるが、意外に外へ出ない昔風の「つくし型の母親」が今でも母親一般の姿であることがわかる。

女性の社会進出の姿は最近目を見張るものがあるにもかかわらず、ここまでのデータからは、子どもの目に映る「母親」の姿は、私たちが子どもの頃に見た母親の姿と大きく変わっていないようである。

図19 家の外へ出るお母さん



●仕事と家事の両立をはかる母親)))

女性の社会進出が増えつつある状況の下で、母親の仕事の状況はどうだろうか。

図20を見ると、74%が「仕事あり」と答えている。しかも、そのうちの4割近くがフルタイムの仕事についている(図21)。(なお、図21～図27までは、図20で「仕事あり」と答えた子どものみを対象とした設問である。)

図22は、母親が仕事を始めた時期をたずねたもので、育児が一段落する「小学生になってから」が最も高く、43%。しかし「ずっと小さい頃から」働き続けている母親も39%とかなりの割合にのぼる。

次に、仕事の時間帯について見てみると、図23が示すように、父親に比べて遅い時間に

図20 お母さんの仕事

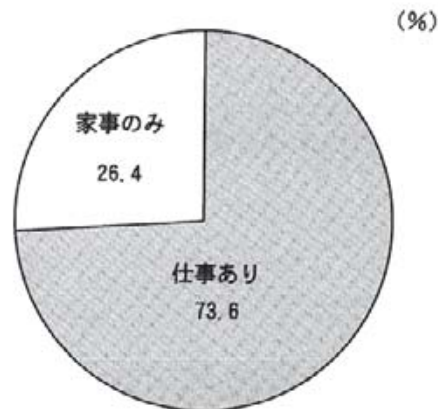
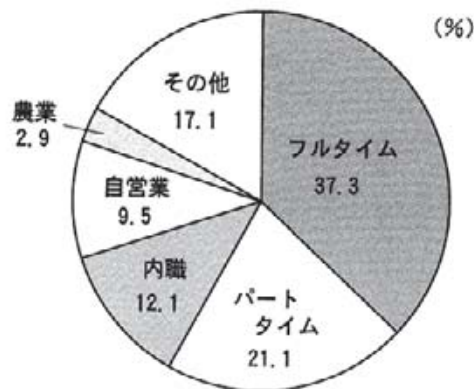


図21 仕事の内容



仕事に出かける母親が多い。また、仕事からの帰宅時間は、図24の6時以前の数値を見ると、父親が10%なのに対して、母親はその5倍近い48%で、母親は父親に比べて遅い時間に家を出て、逆に早い時間に帰宅している様子がわかる。さらに、図25のように、75%が「夜遅くなることがぜんぜんない」と答えているのである。これは母親が家庭生活を重視していることの表れであろう。

仕事の場所についても図26によれば、「家

のすぐそば」の数値が、父親の2倍にあたる44%になっている。

では、母親の仕事を子どもはどう見ているのか。図27が示すように、82%が母親の仕事を「とてもよく知っている」「だいたい知っている」と答えている。

これらのデータから、働く（仕事を持つ）母親の割合は増加しても、家庭と仕事の両立をはかっている、けなげな母親の姿が浮かび上がってくる。

図22 お母さんが仕事を始めた時期

(%)

小学生になってから	幼稚園の頃から	ずっと小さい頃から
42.5	18.4	39.1

図23 仕事に出かける時間（お父さんとの比較）

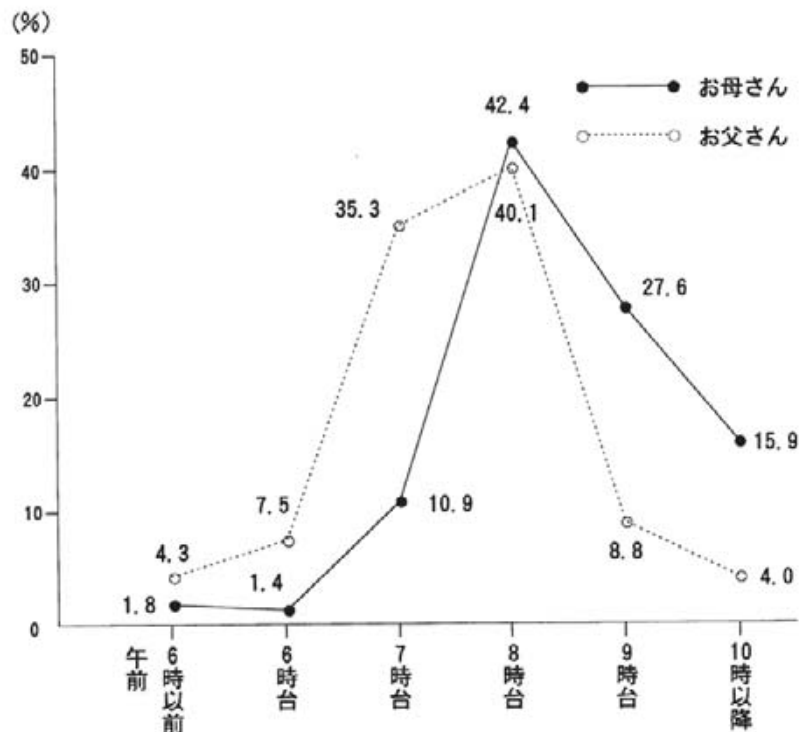


図24 仕事から帰ってくる時間(お父さんとの比較)

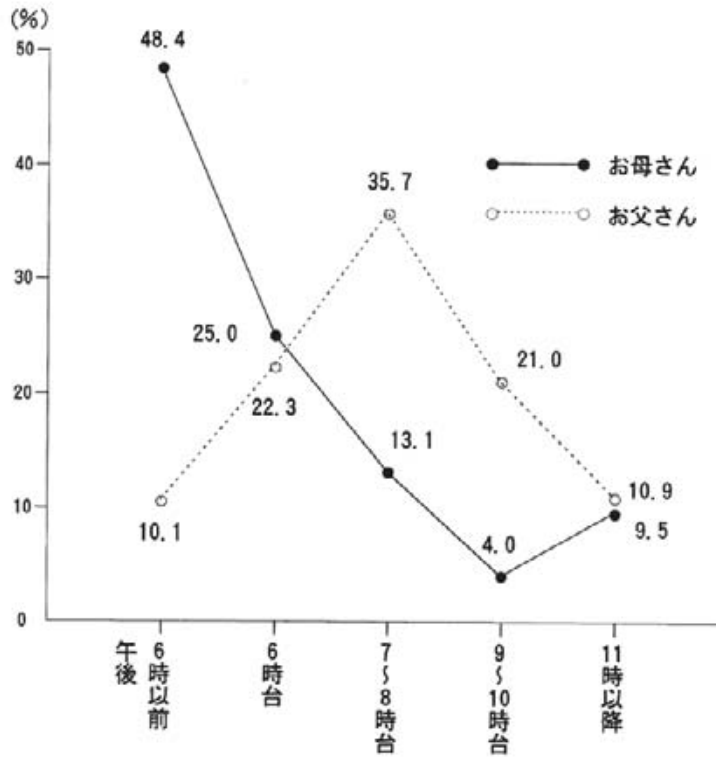


図25 お母さんが夜遅く帰ってくることがあるか



図26 仕事の場所（お父さんとの比較）

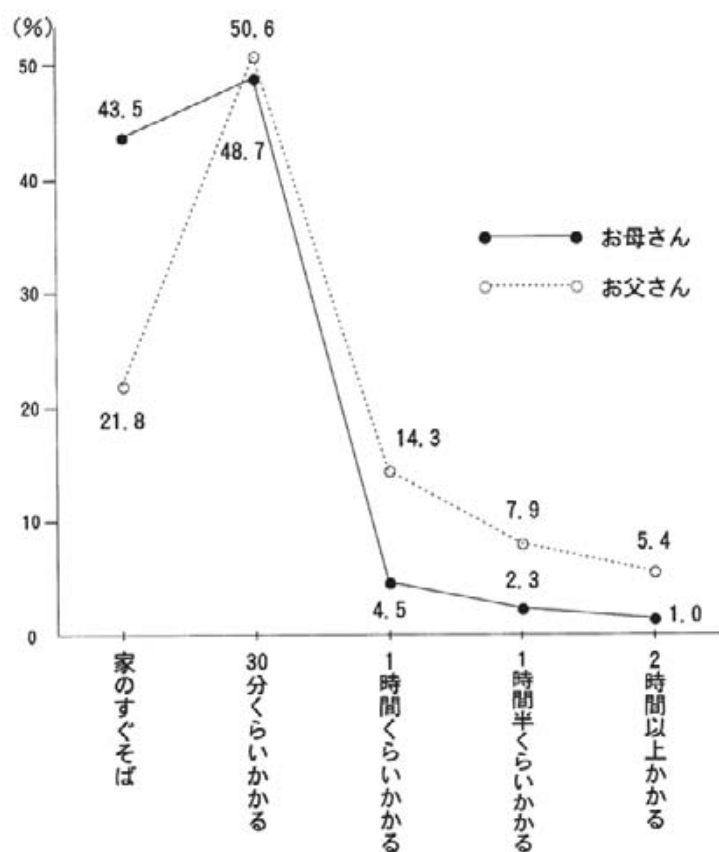
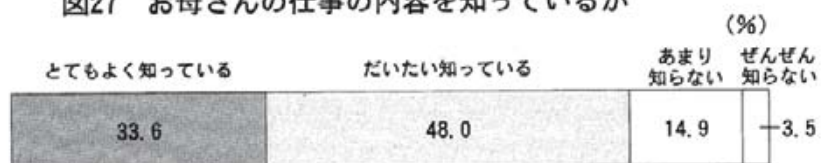


図27 お母さんの仕事の内容を知っているか



3. 家族との関わり



●みんなで決める)))

母親の生活と行動様式の実態をみてきたところで、次に家庭の中の人間関係に目を移して、母親と家族・父親・子どもとの関わりをみていきたい。

図28は、家の中に専用品があるかという視点から、母親と父親の家庭内地位を比べたものである。両者とも専用物の所有率は低いですが、それでも父親のほうが高い数値を示している。

次に、図29は、家庭での決定事項が誰の考えによるのかをみたものである。言い換えるならば、誰の発言権が強いかがである。なお、図中の○印は、その項目について誰の権限が最も強いかを示している。

図が示すように、母親に権限があるのは①「お休みの日の夕食の献立」(75%)や②「子どもの服を買うとき」(66%)といった日常的な決定を求められる場合だけである。母親が強くなったと言われるが、図28、図29を見る限り、家庭の中の地位や権限が高まっているとは言えそうもない。しかし、図29で「お父さんの考えで」という数値が高いのは⑤「自動車を買うとき」(43%)くらいで、「みんなで話し合って」という数値が比較的高いことが示すように、以前のように父親の力が強いわけではなさそうである。

図28 専用品 × お母さんとお父さんの比較

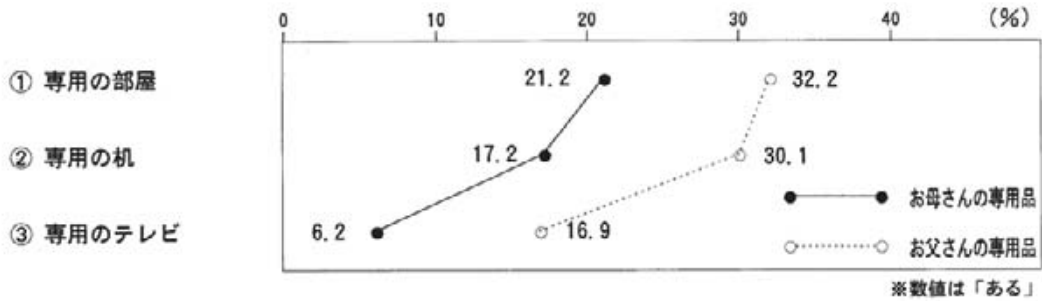
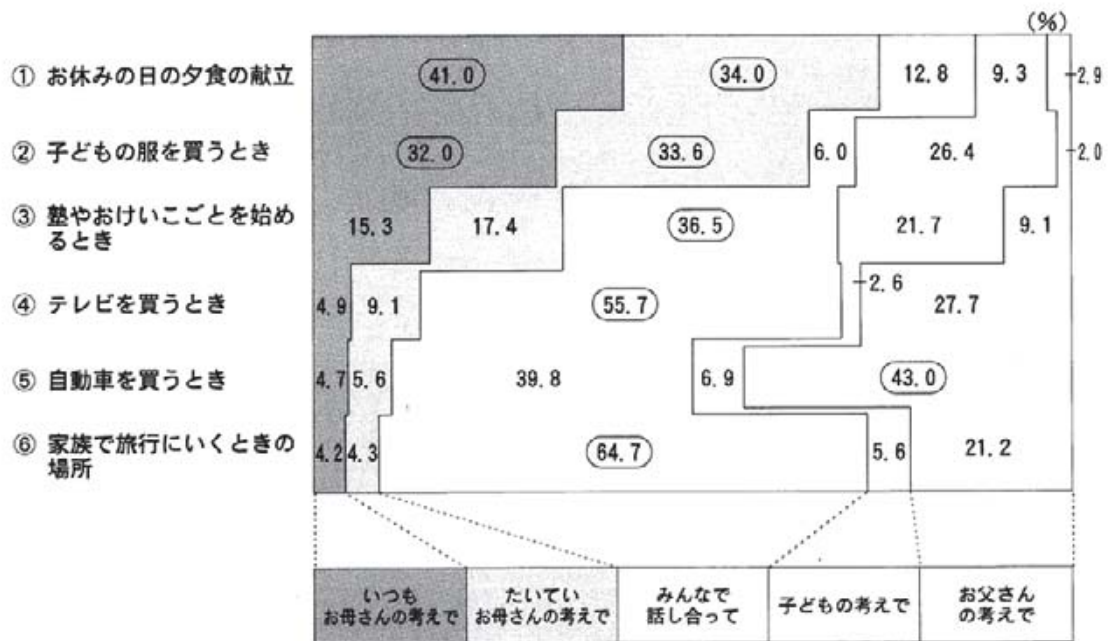


図29 家族の中の決定権



●緊急の場合に協力する父親)))

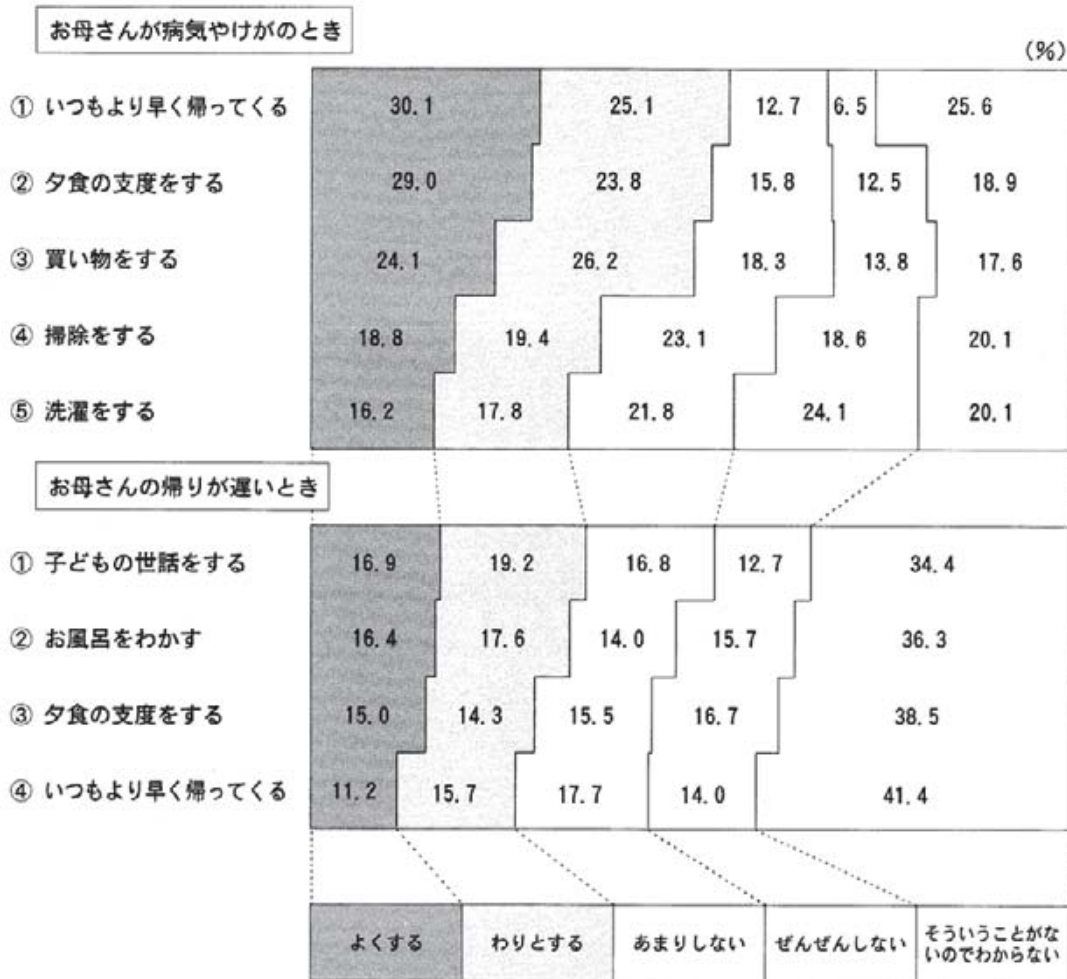
では、母親と父親との関わりはどうなっているか。パートナーである父親との協力体制を見てみよう。

図30は、母親が病気やけがの場合と用事で遅くなる場合の2つのケースで、父親がどれくらい協力してくれるかをみたものである。

まず、母親が病気やけがといった緊急の場合だが、早く帰ってくる父親は55%、夕食の支度は53%、買い物は50%。いつも仕事に追

われて家族サービスもままならない日本の父親の事情を考えると、彼らなりに協力している様子がうかがえる。しかし、単に母親が用事で帰りが遅くなる場合となると、事情は一変する。最も数値の高い子どもの世話でも36%、早く帰ってくるでは27%になってしまう。父親は、ここまでは協力していないということであろう。

図30 お父さんがどれくらい協力してくれるか



●子どもとの関わりを大切にする母親)))

次に、子どもとの関わりについて、いくつかのデータを見てみよう。

図31は家庭での母親の様子をみたもので、①「授業参観に来てくれる」が90%、④「子どもの勉強をみてくれる」が61%、⑤「学校のPTA活動に来てくれる」が52%と、子どもとの関わりを示す項目が比較的高い数値を示している。とくに①「授業参観」の9割という数値は、仕事を持っている母親が7割以

上いることから考えると、ある程度、仕事を犠牲にしても子どもとの関わりを大切にしようとする母親の姿を浮き彫りにしている。

図32は、図31について父親との比較でみたものである。ここでも、子どもとの関わりを示す①「授業参観」や④「勉強をみる」、⑤「PTA活動」といった項目で、母親の数値が父親の数値を上まわっていることがわかる。

図31 家庭生活の中のお母さん

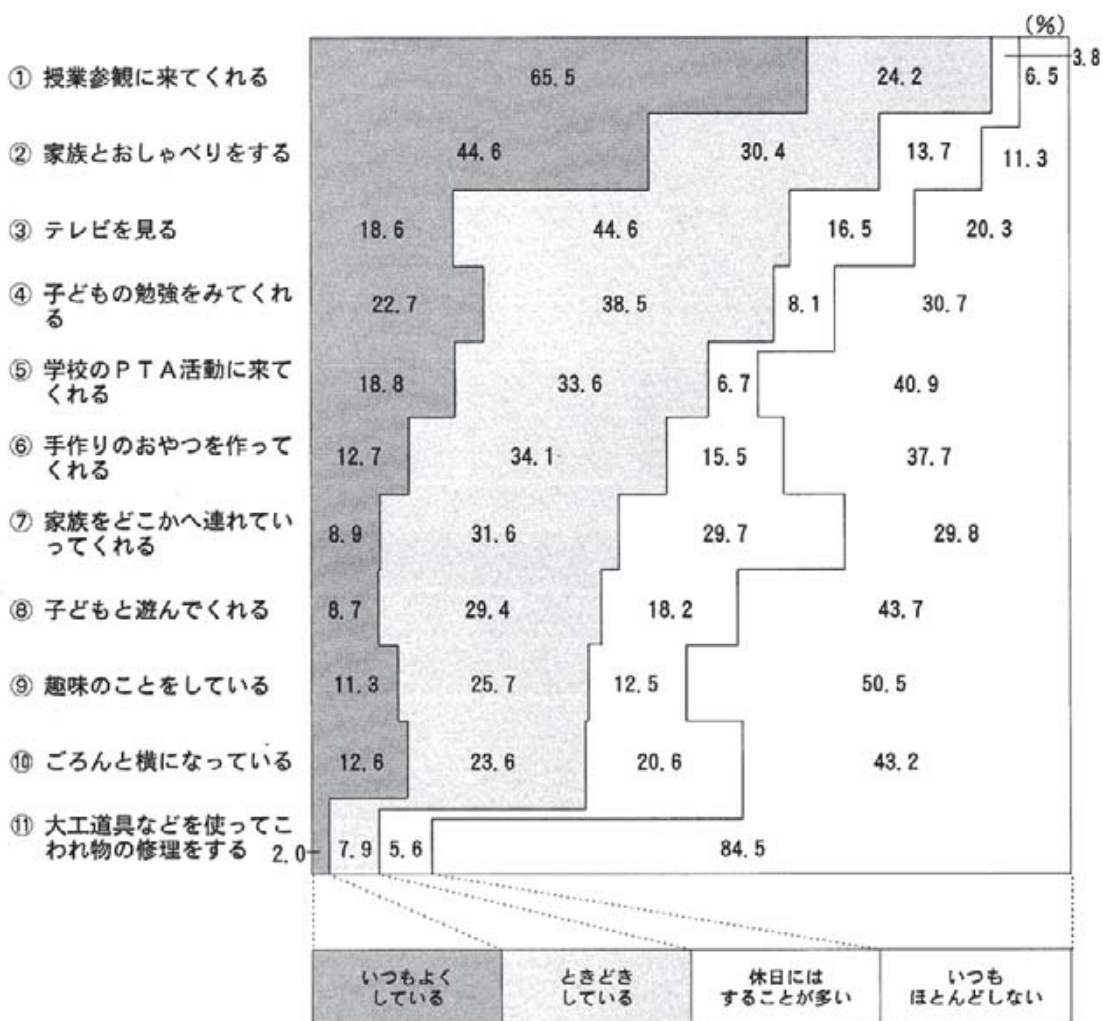
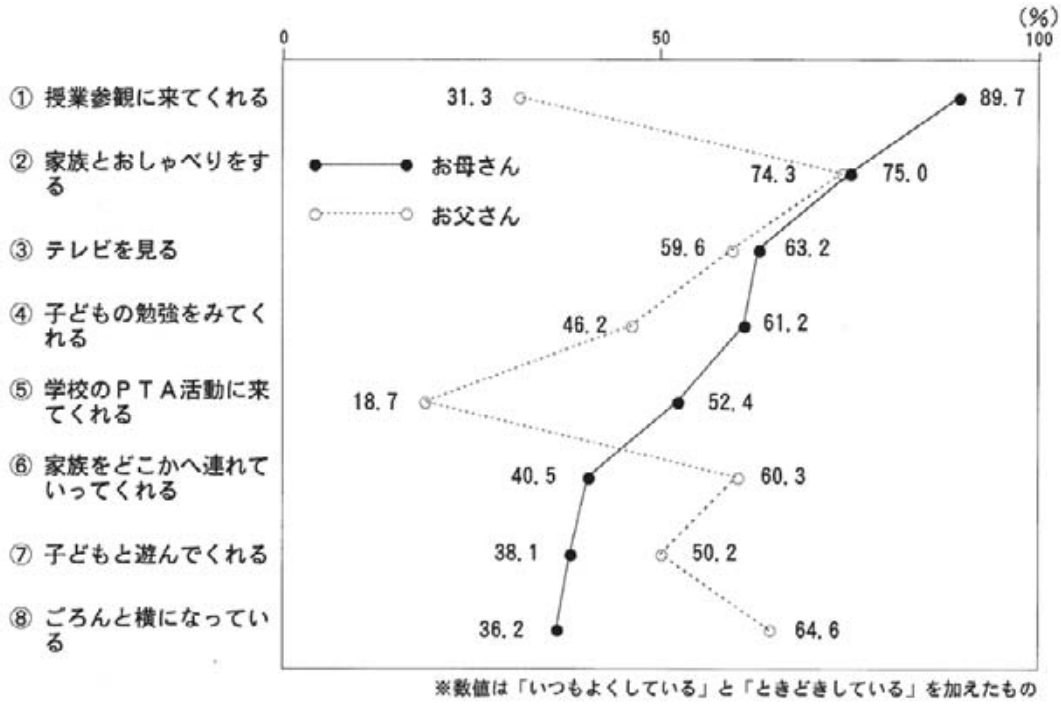


図32 家庭生活の中のお母さんとお父さんの比較



●気がついてくれない母親))

図33は、母親がどれくらい子どものことを気にかけているかをみたものである。図を見ると、①「宿題のこと」が77%、②「学校のできごと」が60%、③「塾やおけいごと」が58%、④「テストの点数」が57%と、⑤「体の具合のこと」や⑥「友だちのこと」よりも高い数値となっている。母親は子どものことを気にかけているものの、その関心が主に学業成績に向けられていることが示されている。

また、父親調査との比較でみた図34によれば、全ての項目で、母親のほうが子どものことを気にかけているのがわかる。

次に図35だが、前の図33がどれくらい気にかけているかをみたものであるのに対して、

図35は、どれくらい気がついてくれるかをみたものである。

図を見ると①「体の具合が悪い」が81%、②「洋服のボタンがとれそう」が73%と外側に表れる事柄についてはさすがに高い数値を示すが、④「友だちにいじわるされたとき」が52%、⑥「先生に叱られたとき」が38%と、子どもの心のひだにふれるようなこととなると、ずっと数値が低くなってしまふ。

ほとんどの母親が、子どもとの関わりを大切にしようとしているものの、子どもの心の中にまでその配慮が行き届いているわけではなさそうだ。子どもの心が昔より扱いの難しいものになってきていることを考えると、少々不安も覚える結果である。

図33 お母さんがふだんあなたに聞くこと

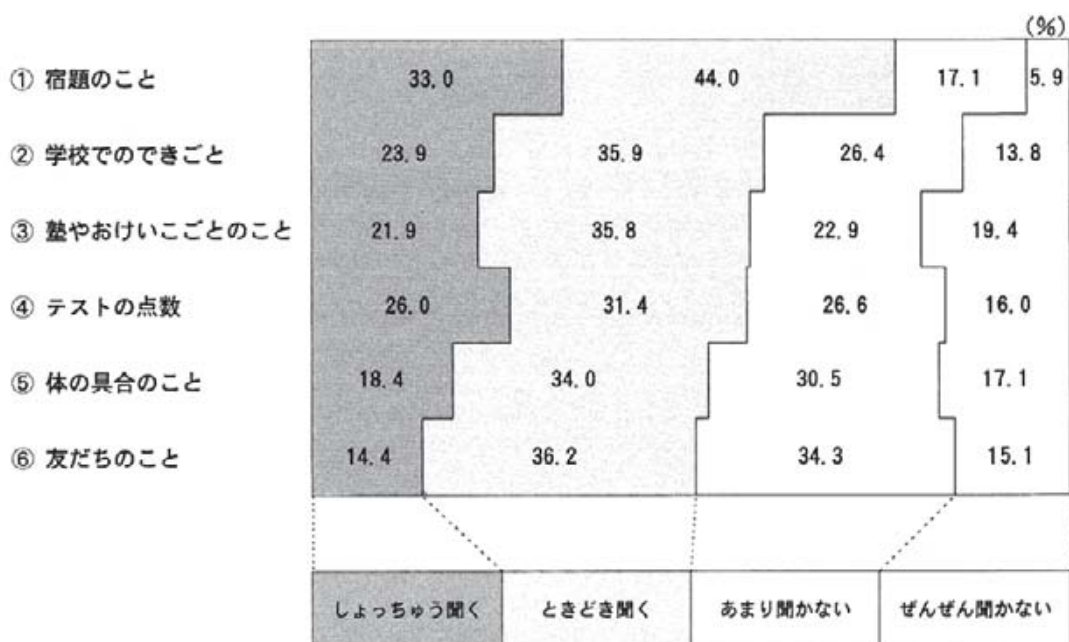


図34 両親がふだんあなたに聞くこと × お母さんとお父さんの比較

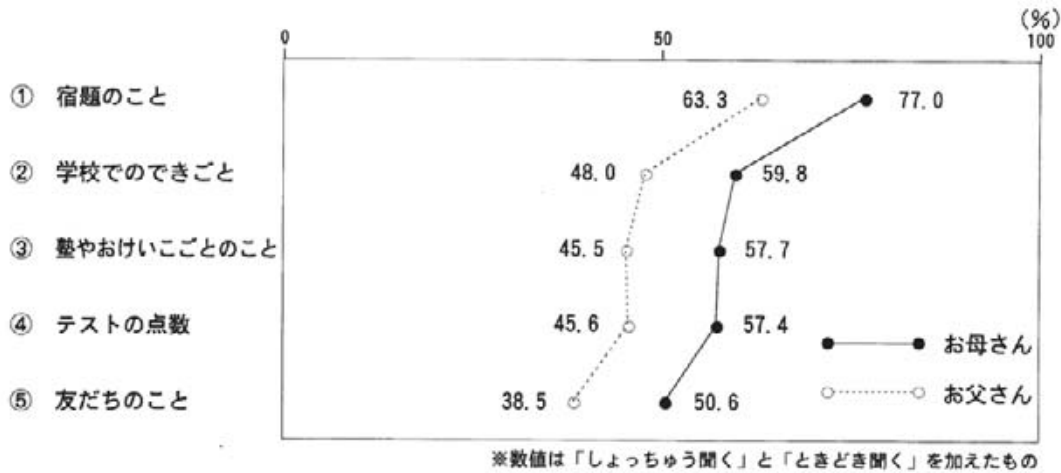
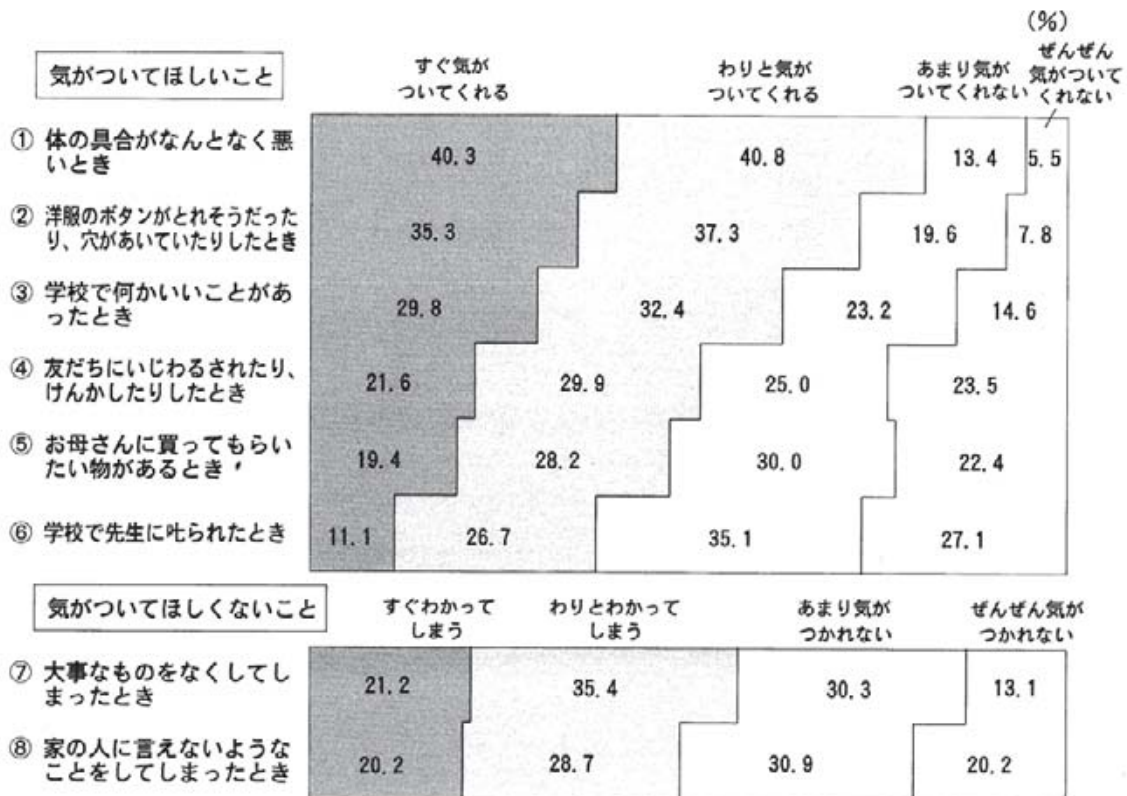


図35 お母さんがあなたのことを気がついてくれるか



●意外ときびしい母親のしつけ)))

子どもとの関わりに関連して、母親の叱り方、すなわち、しつけについてもふれておきたい。

図36は母親が「盗み」から「行儀が悪い」までの5つの場合で、どのような叱り方をするかをみたものである。

「どなったりぶったりする」と「お説教をする」という比較的きびしい叱り方に注目すると、④「通知表が下がったとき」と⑤「お行儀が悪かったとき」はさすがに数値が低いものの、「盗み」や「けが」や「うそ」では高い数値になっているのが目につく。①「人

の物をとったとき」は合わせて77%、②「友だちにけがをさせたとき」は70%、③「うそをついたのがばれたとき」は56%に達する。

図37は性差をみたものだが、とりわけ男子にきびしくなっている。

図38は、同様に父親の叱り方と比較したものである。母親の叱り方を示す実線と父親の叱り方を示す破線がほぼ一致しており、母親と父親の叱り方が同じであることが読み取れる。母親と父親の同質化の一端をうかがわせるデータである。

図36 お母さんの叱り方

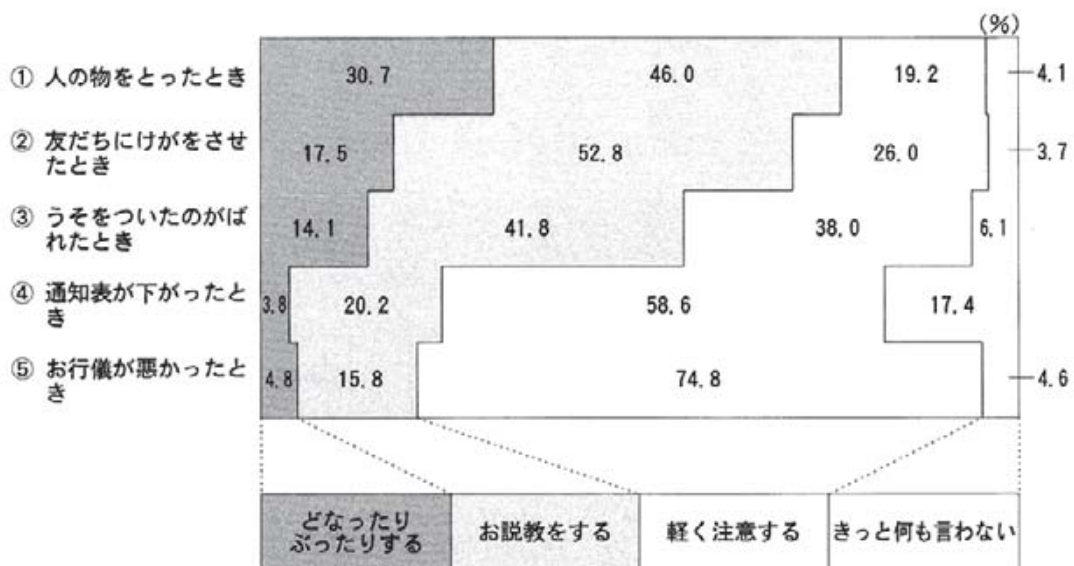


図37 お母さんの吐り方 × 性差

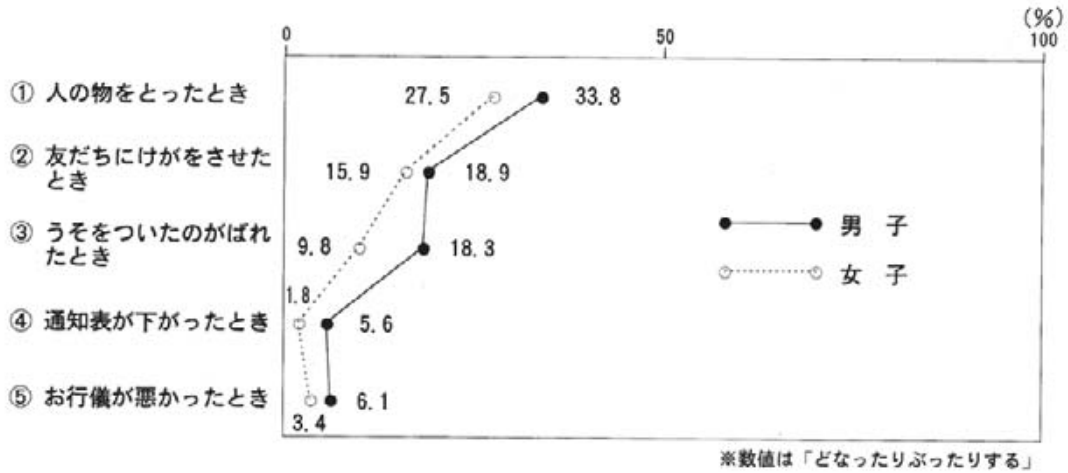
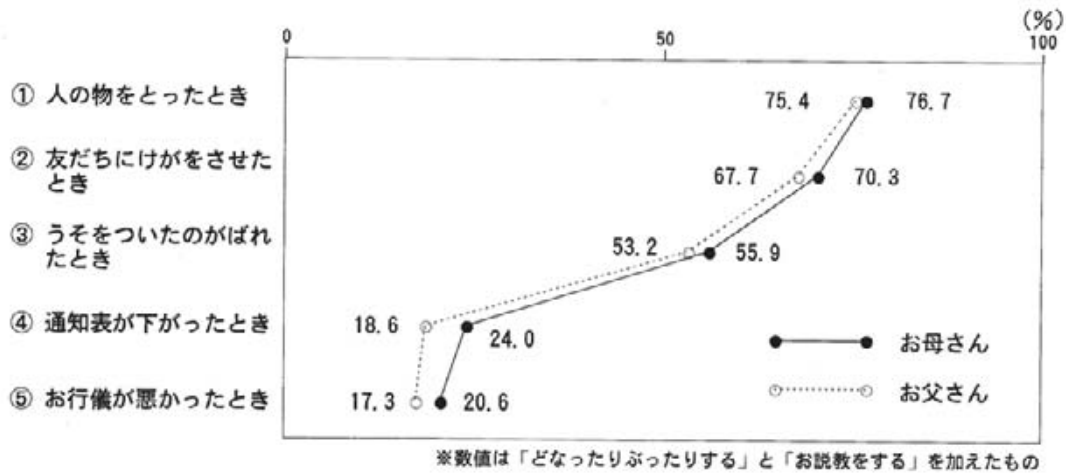


図38 両親の吐り方（お父さんとの比較）



●両親との同一視)))

ここまでのデータから、いくつかの問題点はあるものの、基本的には子どもとの関わりを大切にしようとする母親の姿に、昔と大きな変化はみられないようである。

では、子どもは母親をどのくらい身近な存在としてとらえているのだろうか。

図39は子どもが母親の個人的側面をどれくらい知っているのかをみたものである。「と

てもよく知っている」と「だいたい知っている」を加えた数値を見ると、①「母親の誕生日」87%、②「母親の友だち」66%、③「母親の好物」52%と、子どもはけっこう母親のことを知っている。ただ、図40を見ると、この数値には性差がみられ、女子のほうが男子よりも母親をよく知っていることがわかる。

また図41が示すように、85%が母親を幸せ

図39 お母さんのことをどれくらい知っているか

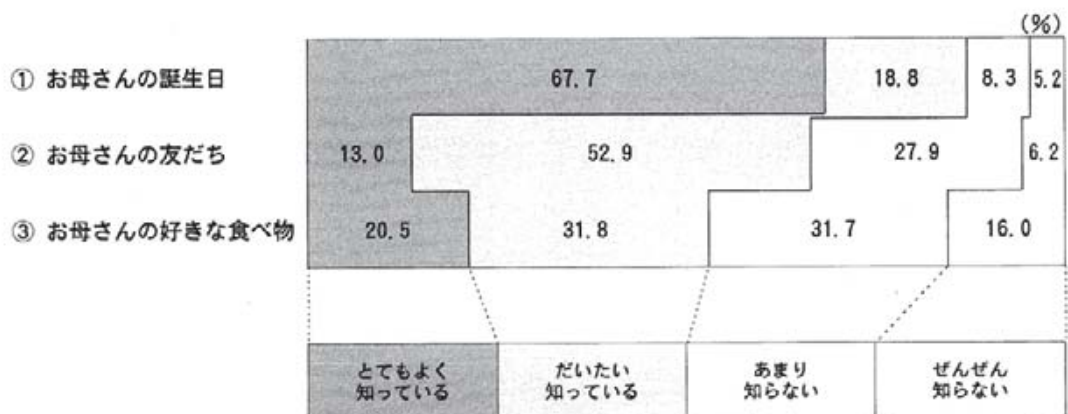
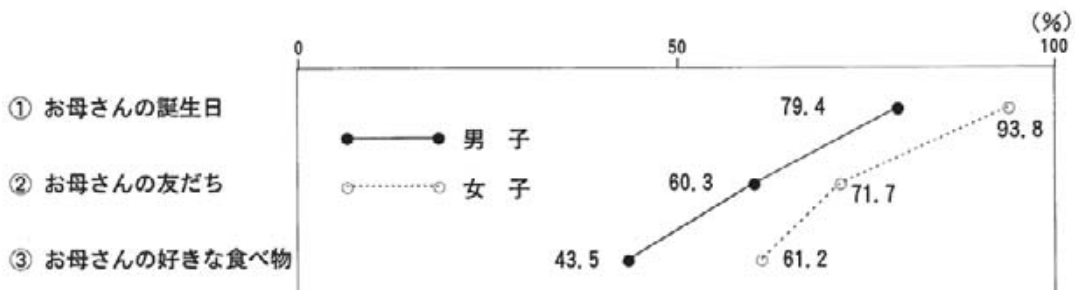


図40 お母さんのことをどれくらい知っているか × 性差



※数値は「とてもよく知っている」と「だいたい知っている」を加えたもの

な存在とみている。母親にもそれなりの悩みはあるのだろうが、子どもたちの目には、一様に幸せそうに見えるのであろう。

さらに、図42によれば、88%が母親を「とても好き」「わりと好き」と答えている。

そこで次に、子どもたちは、母親のどんな点を誇りに思っているのかをみておきたい。

図43は「友だちに自慢できること」という形で、母親の誇りに思う点をたずねたものである。図中の上位の項目を拾ってみると、①「家事をがんばっている」が93%、②「料理が上手」が87%、③「明るい」が82%、④

「きれい好き」が76%、④「編み物や手芸が上手」が73%、⑤「やさしい」が69%となる。

「家事」「料理」「明るい」「きれい好き」「編み物上手」「やさしい」という項目が示すように、子どもたちはどうやら母親の家庭的な部分に誇りを持っているようである。

図44と図45は、母親、父親との同一視をみたものである。図44の母親との同一視をみると、男子よりも女子のほうが高く、逆に図45の父親との同一視をみると、女子より男子のほうが高いことがわかる。それぞれ、同性の親に同一視をしているわけである。

図41 お母さんは幸せそうか

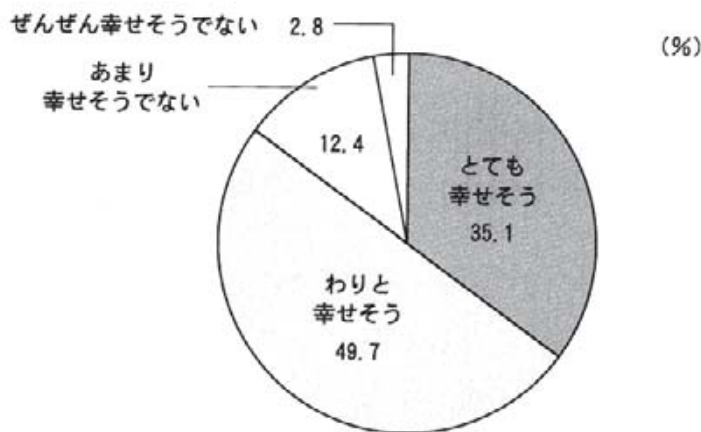


図42 お母さんのことが好きか

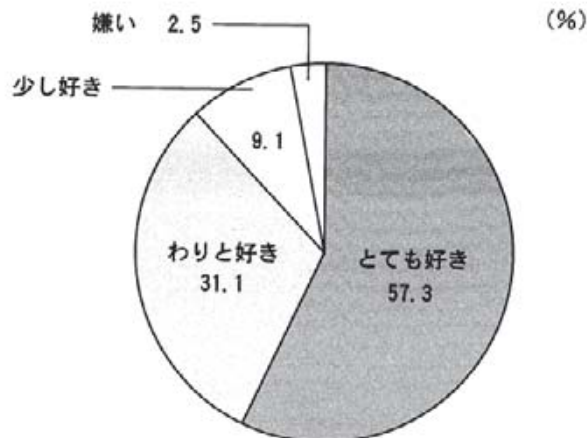


図43 お母さんについて友だちに自慢できること

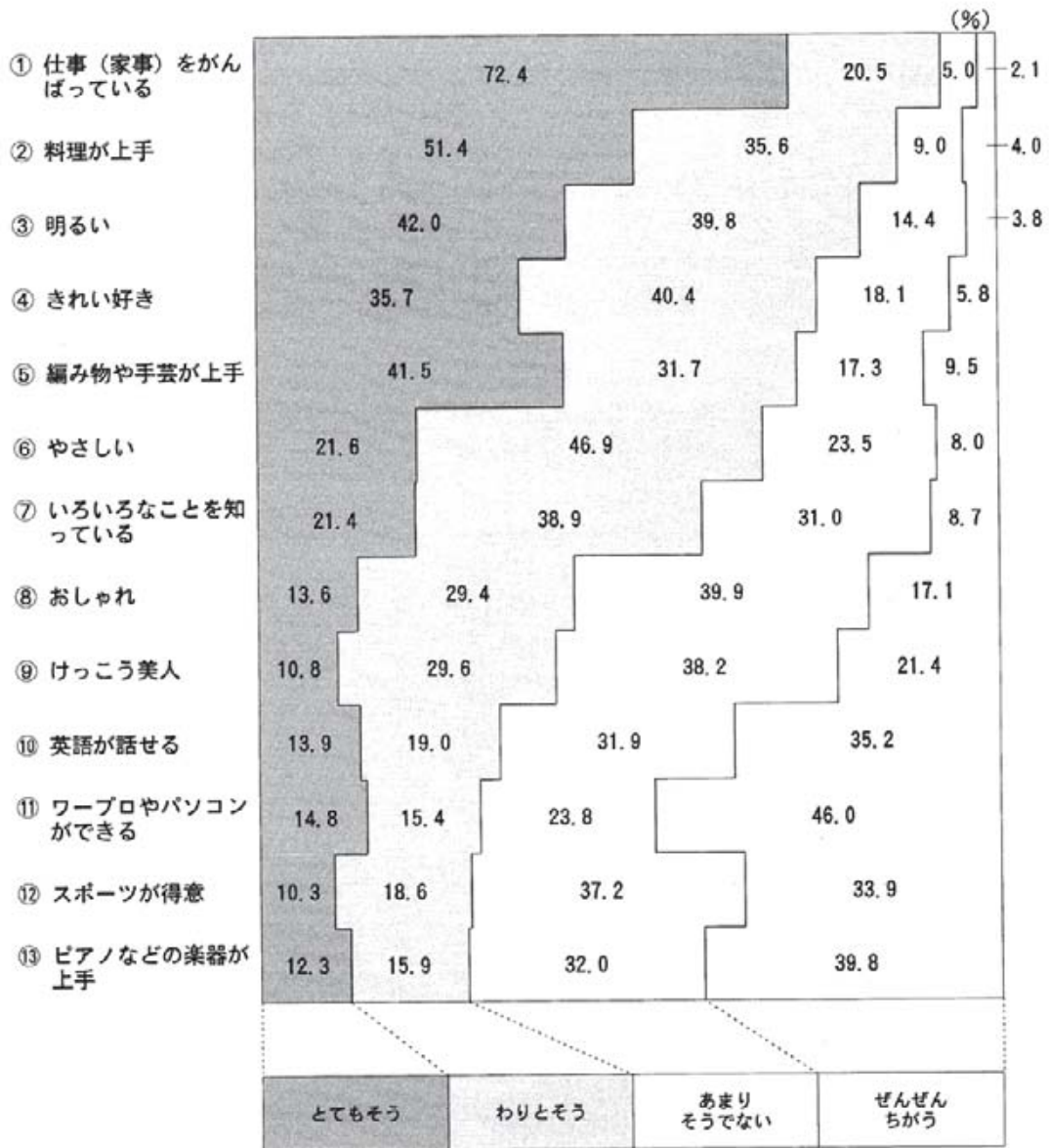


図44 お母さんとの同一視

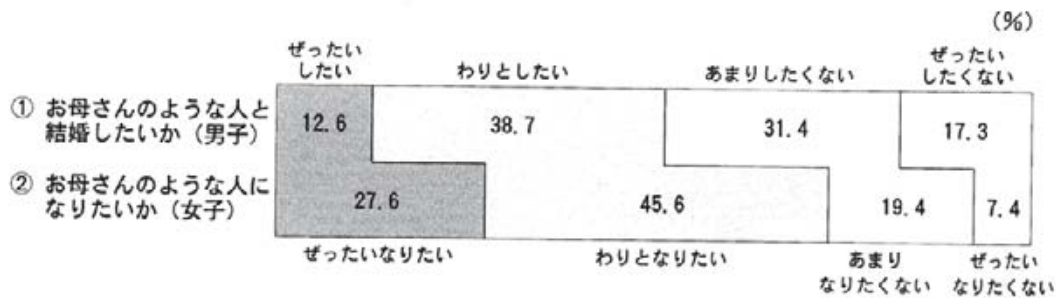
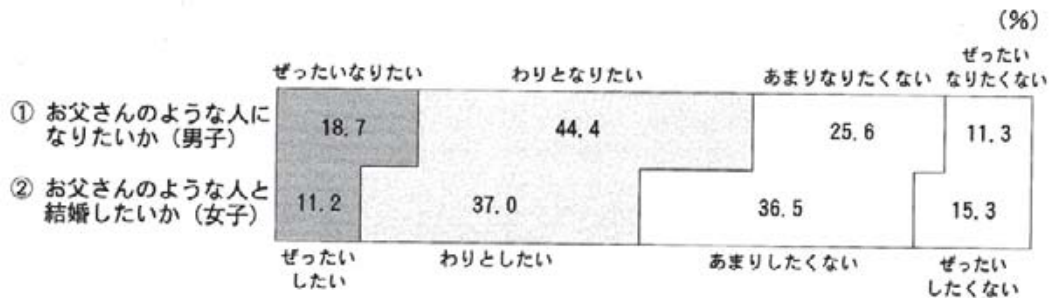


図45 お父さんとの同一視



●安定している母親像)))

ここまでのデータが示すように、母親のライフスタイルは、以前に比べて大きくは変わっていないし、昔風のつくし型の母親も依然として多い。子どもとの関わりも大切にしている。しかし家族よりも自分の生活にウエイトを置く母親の存在も、まだ少数派ながら出てきている。さらに、仕事と家庭の両立に

苦慮する姿も垣間見ることができた。

そうした現代の母親を子どもたちは、幸せそうだととらえているし、好きだとも思っている。そして、同性の親との同一視も、かなり十分できている。結果として日本の母親は、子どもたちにとっては、かなりよいお母さんと結論づけることができそうだ。

4. 今日の母親像を追って



前章までのデータから浮かび上がってきた現代の母親像は、家庭生活を大切に、家族につくす行動様式を持って、子どもの目からは幸せそうに暮らしている母親であった。しかし、一方で、母親と父親の同質化や、ある程度自分の生活を楽しむ母親の存在など、か

つての母親とは違うタイプの母親の姿も垣間見られたように思われる。そこで、ここでは、子どもの目に映るこうした母親像をいくつかのクロス集計を用いて分析し、さらに今日の母親の姿に迫ってみることにする。

●子どもから好かれる母親のタイプ))

まず、今日の子どもたちが、どのような母親像を求めているかを、図46「お母さんが好きか」への反応をもとにデータを見ていくことにした。図が示すように、右端の「お母さんが嫌い」と答えた子どもは全体の2.5%とごく少数であるため、ここでは、「とても好き」と答えた子どもと「少し好き」(換言すれば少ししか好きでない)と答えた子どもの

反応を比較してみた。図47は、両群の母親たちの一日の生活についての結果を整理したものである。図が示すように、子どもたちは、①「家族よりいつも早く起き」、朝、子どもが起きたときには、②「ちゃんと着替えて家事」をし、食事と一緒に食べてくれる母親、つまりいつも自分のそばにいてくれる母親が大好きなようで、いわば自分や家庭に引きつ

けた評価をしていることがわかる。

さらに、図48には、子どもたちが「家族の世話を熱心にしてくれる」母親像を求めている様子が示されている。図を見ると、子どもから好かれる母親は、①「祖父母を大切にする」し、②「家族の誕生日を大切にする」、③「みんなのご飯をよそう」、⑥「昔からの

行事には自分で料理を作る」など、「家族につくすタイプ」である。

いつも子どもの身近にいて、家族につくしてくれるお母さん——そんないわば伝統的な昔風な「母親イメージ」が子どもたちに求められている。母親の社会進出は、子どもの側からは期待されていないことになる。

図46 母親が好きか（再掲）

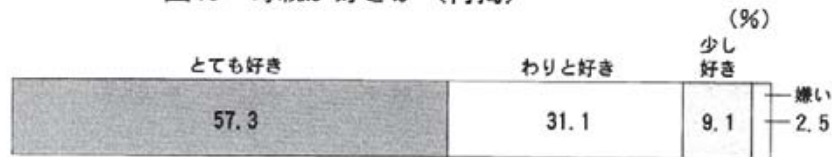


図47 母親が好きか × 母親の生活

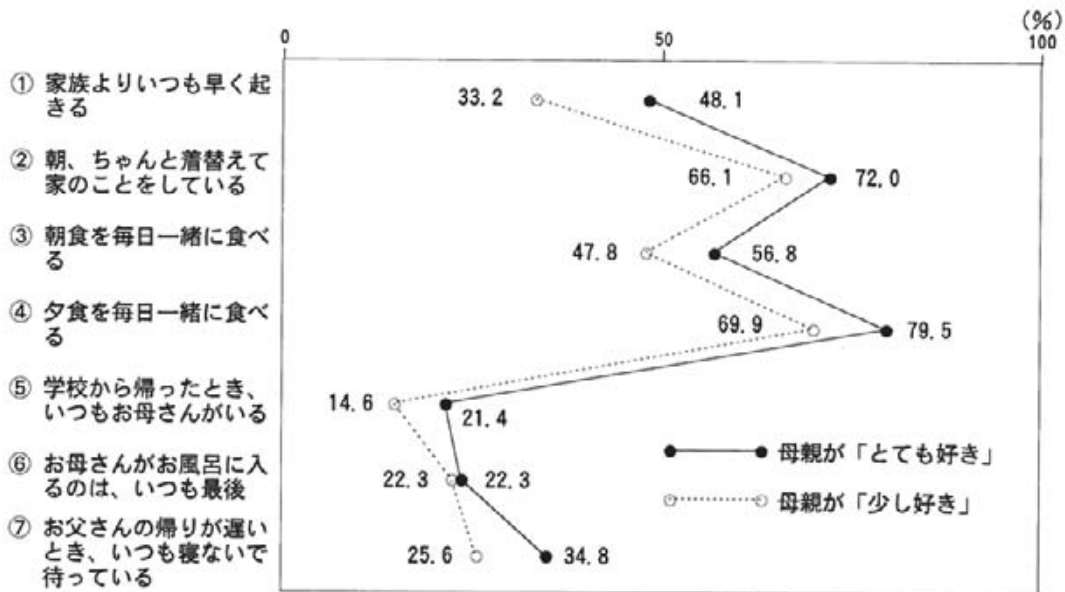
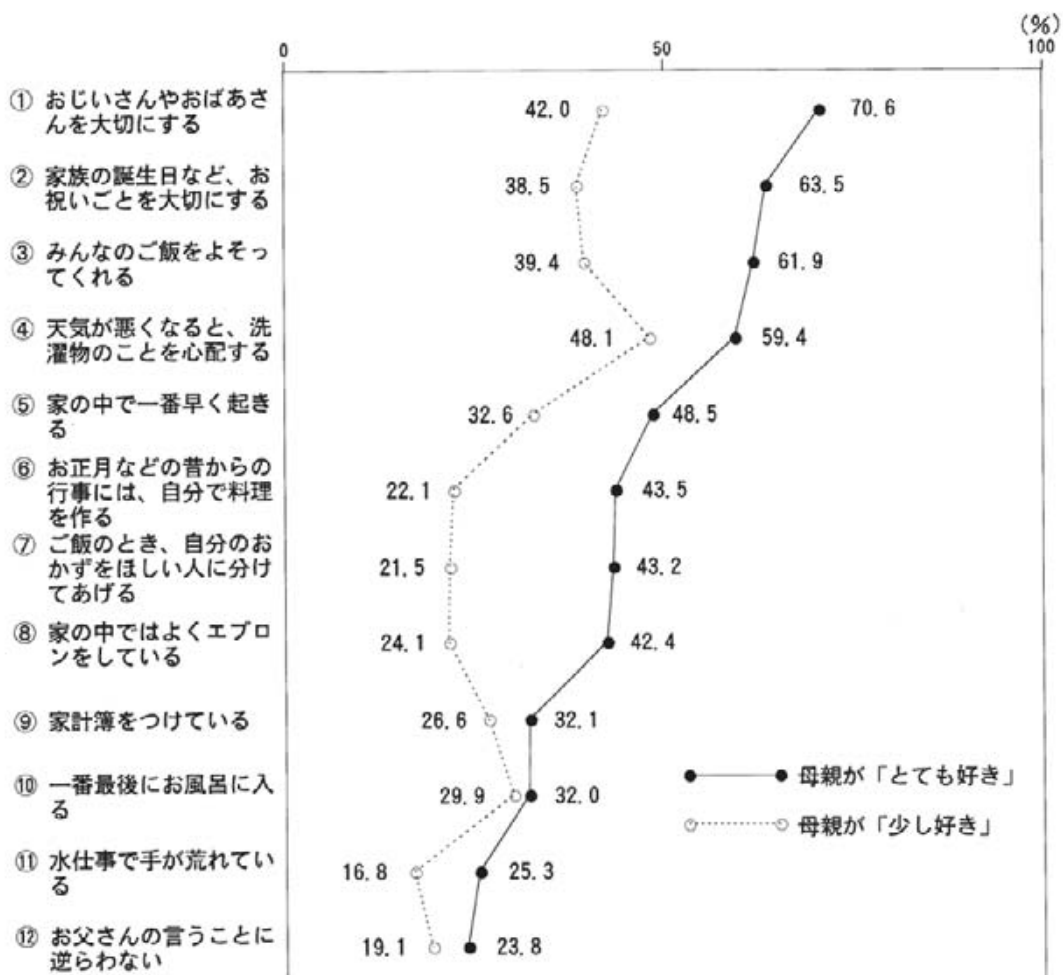


図48 母親が好きか × 母親は家族につくすほうか



※数値はそれぞれの項目に「とてもよくあてはまる」と答えたもの

●家族の世話をまめにする中で)))

次に、子どもからの評価が高かった「家族の世話をよくする」母親たちを取り上げ、子どもとの関わりや行動様式などのデータを見ていくことにしよう。

まず、「いつも子どものそばにいて、家族の世話をしてくれる」タイプの母親を抽出するため、図49にあるように「家族につくすタイプの母親像」についての合成点スケールを作成した。図の上の①～⑫の12項目全てについての反応を得点化し、それを加算したものを「つくす母親得点」とした。図の下に分布状況を示したが、全体に高い得点への反応が多く、やはり家族の世話をまめにする母親の姿が反映されているようである。ここでは、得点の高いほうから257人(13.5%)を「つくす母親」群、逆に、得点の低いほうから285人(14.9%)を「つくさない母親」群として、両群の反応を以下に比較してみる。

表5は母親の家族での姿や子どもとの関わりとの関連をみたものである。「授業参観に来てくれる」「家族とおしゃべりする」「勉強をみてる」「PTA活動に来てくれる」「おやつを作ってくれる」「家族をどこかへ連れていってくれる」「遊んでくれる」「趣味のことをする」「修理をする」などの多くの項目で「つくす母親」が家庭や子どもにまめに関わっていることがわかる。

逆に「つくさない母親」の数値が高いのは、「テレビを見る」「ごろんと横になっている」などで、自己中心的な、しかもなまけ型の母親である。

また、表は割愛したが、P.37図35の項目とのクロス集計の結果からも、こうした「つくす母親」群が、子どもの身のまわりのことや気持ちの変化に敏感に反応しており、子

もとの関わりや深さが感じられた。

そうした関係を映し出すように、次の図50では、子どもたちが家族の世話をよくする「つくす母親」たちを誇らしく思っている傾向が顕著に表れている。「お母さんについて友だちに自慢できること」の項目を用いているが、①「仕事をがんばっている」88%と44%、をはじめ、②「料理が上手」72%と29%、③「明るい」58%と24%、④「きれい好き」59%と16%、⑤「編み物や手芸が上手」65%と21%、⑥「やさしい」40%と8%、⑦「いろいろなことを知っている」38%と11%など、両群の数値の差は非常に大きいことがわかる。

次に、「つくす母親」はともすると家の中だけにいる非社会型の母親のイメージでとらえられやすいが、この点を見るために表6を用意した。

母親の行動半径との関わりで見ると、「つくす母親」と「つくさない母親」では、①「PTAなどにいく」69%と41%、②「友だちとお茶を飲みに行く」45%と22%、③「友だちと食事に行く」31%と24%、④「図書館に行く」29%と9%、⑤「映画などに行く」20%と13%、⑥「おけいごとなどに行く」18%と10%、⑧「友だちと旅行に行く」11%と6%のように、いずれも「つくす母親」のほうに数値が高く、「つくす母親」がけっこう社会的な行動をしていることがわかる。「つくす」といっても、昔のつくす母親とはその内容がかなり違ってきていることもわかる。

なお、「つくさない母親」の数値が大きい、またはほとんど差がないのは、⑩「お酒を飲みに行く」10%と7%、⑦「カラオケに行く」9%と10%であることもみられる。

図49 「家族につくす母親」加算点の分布

	とてもよくあてはまる	わりとあてはまる	少しあてはまる	ぜんぜんあてはまらない
① おじいさんやおばあさんを大切に 大切にする	4 点	3 点	2 点	1 点
② みんなのご飯をよそってくれる				
③ 家族の誕生日など、お祝いご とを大切に 大切に 大切に				
④ 天気が悪くなると、洗濯物の ことを心配する				
⑤ 家の中で一番早く起きる				
⑥ ご飯のとき、自分のおかずを ほしい人に分けてあげる				
⑦ お正月などの昔からの行事に は、自分で料理を作る				
⑧ 家の中ではよくエプロンをし ている				
⑨ お父さんの言うことに逆らわ ない				
⑩ 一番最後にお風呂に入る				
⑪ 水仕事で手が荒れている				
⑫ 家計簿をつけている				

〔12の項目全てに対する反応を得点化し、加算した合計点を「つくす母親」得点とした。〕

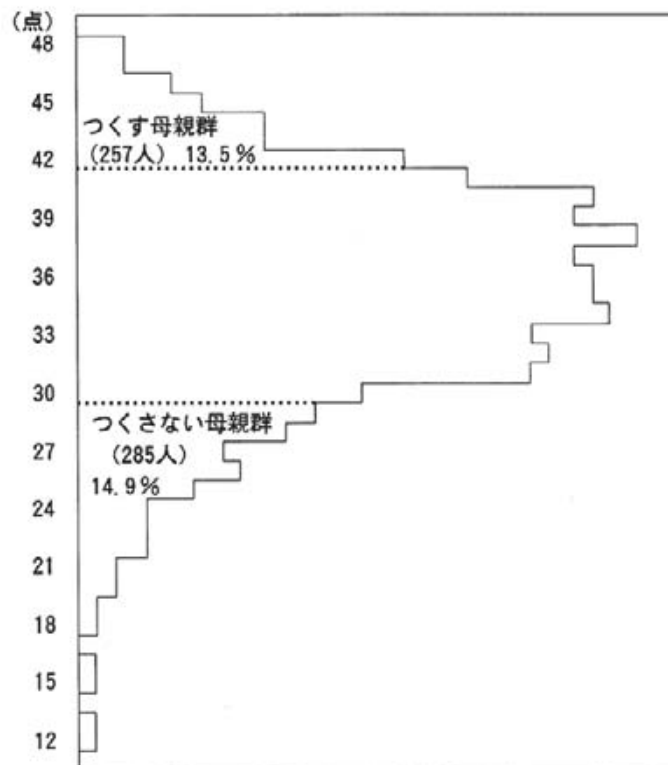


表5 家庭生活の中のお母さん × 母親のタイプ

	(%)		
	つくす母親群	つくさない母親群	全 体
① 授業参観に来てくれる	95.2	> 84.9	89.7
② 家族とおしゃべりをする	80.8	> 62.7	75.0
③ テレビを見る	55.7	< 64.2	63.2
④ 子どもの勉強をみてる	74.0	> 43.1	61.2
⑤ 学校のPTA活動に来てくれる	63.7	> 39.6	52.4
⑥ 手作りのおやつを作ってくれる	66.5	> 29.0	46.8
⑦ 家族をどこかへ連れていってくれる	48.1	> 31.4	40.5
⑧ 子どもと遊んでくれる	52.0	> 29.9	38.1
⑨ 趣味のことをしている	50.6	> 27.2	37.0
⑩ ごろんと横になっている	28.2	< 40.3	36.2
⑪ 大工道具などを使ってこわれ物の修理をする	16.6	> 7.8	9.9

※数値は「いつもよくしている」と「ときどきしている」を加えたもの

図50 お母さんについて友だちに自慢できること × 母親のタイプ

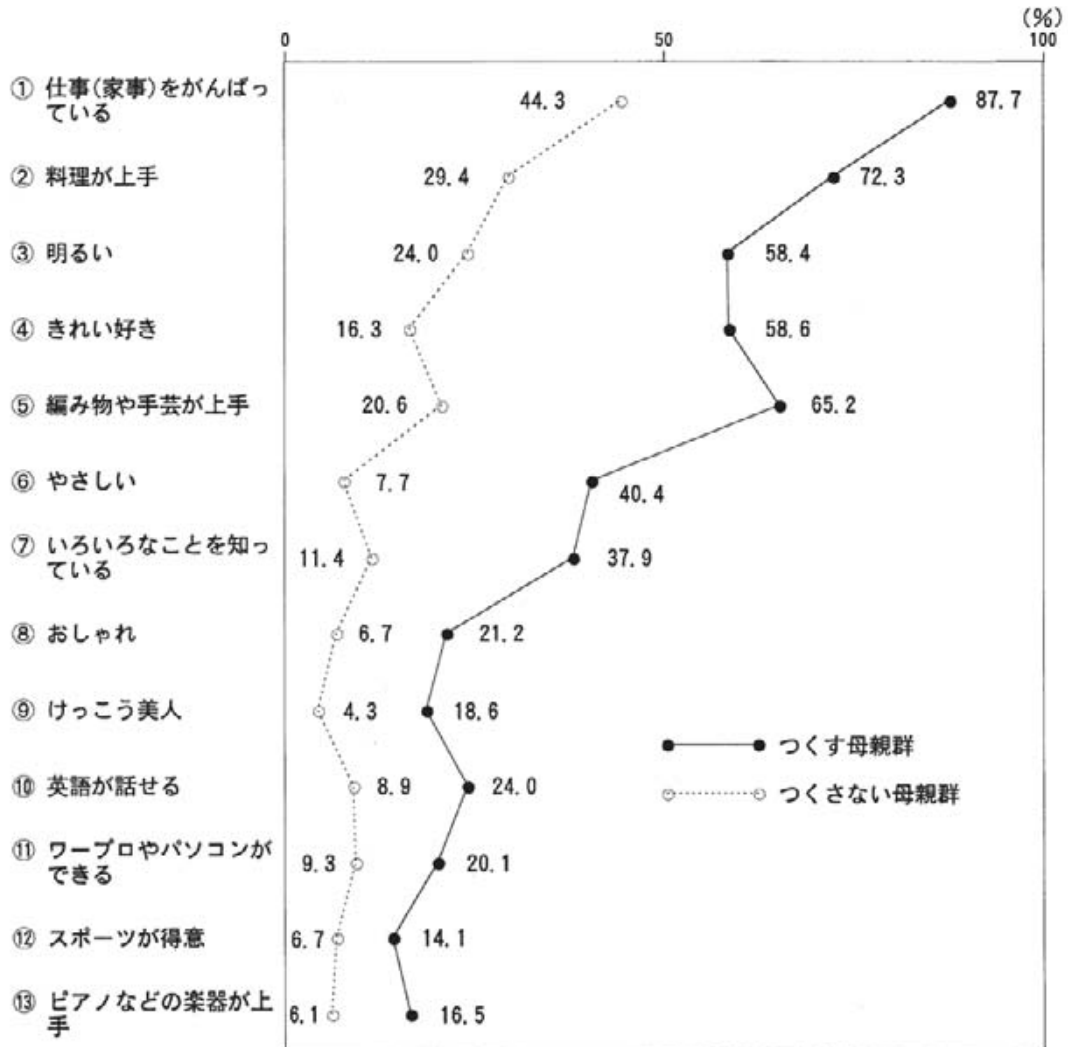


表6 母親の行動半径 × 母親のタイプ

(%)

	つくす母親群		つくさない母親群	全 体
① PTAや地域の集まりに行く	68.7	>	40.8	54.1
② 友だちとお茶を飲みに行く	44.5	>	21.8	31.8
③ 友だちと外に食事に行く	30.7	>	23.6	28.2
④ 図書館に本を借りに行く	28.8	>	8.8	17.8
⑤ 映画やコンサートに行く	19.9	>	12.6	17.8
⑥ 趣味のおけいごとに行く	17.5	>	9.5	12.3
⑦ カラオケに行く	9.8	=	8.8	9.8
⑧ 友だちと旅行に行く	10.6	>	5.7	8.4
⑨ テニスやゴルフに行く	12.6	>	6.4	8.3
⑩ お酒を飲みに行く	6.7	<	10.2	8.2

※数値は「よくいく」と「わりといく」を加えたもの

●生活を楽しむ母親)))

これまで「つくし型の母親」の分析をしてきたわけだが、つくし型といっても昔のように家族につくすことだけに埋没しているのではなくて、けっこう社会的に行動もしている姿を見てきた。そこで次に「生活を楽しむ」型のいわば現代型、昔にはなかったタイプの母親像について、つくし型同様加算点を算出して「生活を楽しむ母親」「楽しまない母親」の比較を試みることにしよう。

図51に示した「生活を楽しむ母親」加算点の分布がそれである。一昔前の母親たちなら、一般的にはしていなかったであろう生活の楽しみ方、言い換えれば、今日的な母親たちの生活の楽しみ方を①～⑩の項目で代表させ、どれだけ自分の生活にウエイトをおいて楽しもうとしているのかをスケール化したものである。得点の分布状況を見ると、全体としては、20点前後の反応に集中しており、平均して「少しあてはまる」程度の反応と言えようか。

ここでは、図の上位326人を「生活を楽しむ母親」、図の下位316人を「生活を楽しまない母親」と名づけ、いくつかのクロス集計の結果から両群を比較してみることにした。まず、図52を見てみよう。これは、母親の行動

半径についてのデータであるが、やはり、「楽しむ母親」群は、積極的に家庭の外に出かけていく機会を持っていることがわかる。とくに、友だちとのつきあいに関する項目で両群の差が顕著である。

では、子どもたちは、そうした母親の姿をどう評価しているのだろうか。表7に、「お母さんについて友だちに自慢できること」についての反応を両群で比較してみた。全体に「生活を楽しむ母親」たちを、子どもたちはけっこう自慢に思っていて、両群の差は大きい。生活を楽しむ行動半径の広い母親を子どもたちが評価している様子がわかる。

では、こうした「楽しむ母親」たちは、家族とどう関わっているのだろうか。図53では家族の世話に関する項目との関連をみた。前述の「つくす母親」群ほどではないにしろ、「生活を楽しむ母親」たちも、けっこう家庭では家族の世話をまめにしていることがわかる。両群で差の大きいのは③「家族のお祝いごとを大切にする」、⑥「ご飯のとき、おかずを分けてあげる」、⑦「昔からの行事食を作る」など、自分で楽しみながらも、家族のためにもけっこうつくしている。

図51 「生活を楽しむ母親」加算点の分布

	とてもよくあてはまる	わりとあてはまる	少しあてはまる	ぜんぜんあてはまらない
① 友だちがたくさんいる				
② 長電話をする				
③ いつもきれいにお化粧をしている				
④ ビデオでテレビ番組を録画する				
⑤ ラジカセやCDでよく好きな曲をきいている				
⑥ ワープロやパソコンができる	4 点	3 点	2 点	1 点
⑦ 流行の洋服を買ってくる				
⑧ 一番テレビが見やすい席にすわる				
⑨ マンガ本を読む				
⑩ お風呂上がりにビールを飲む				
⑪ 夕食に店屋物をとる				

〔11の項目全てに対する反応を得点化し、加算した合計点を「楽しむ母親」得点とした。〕

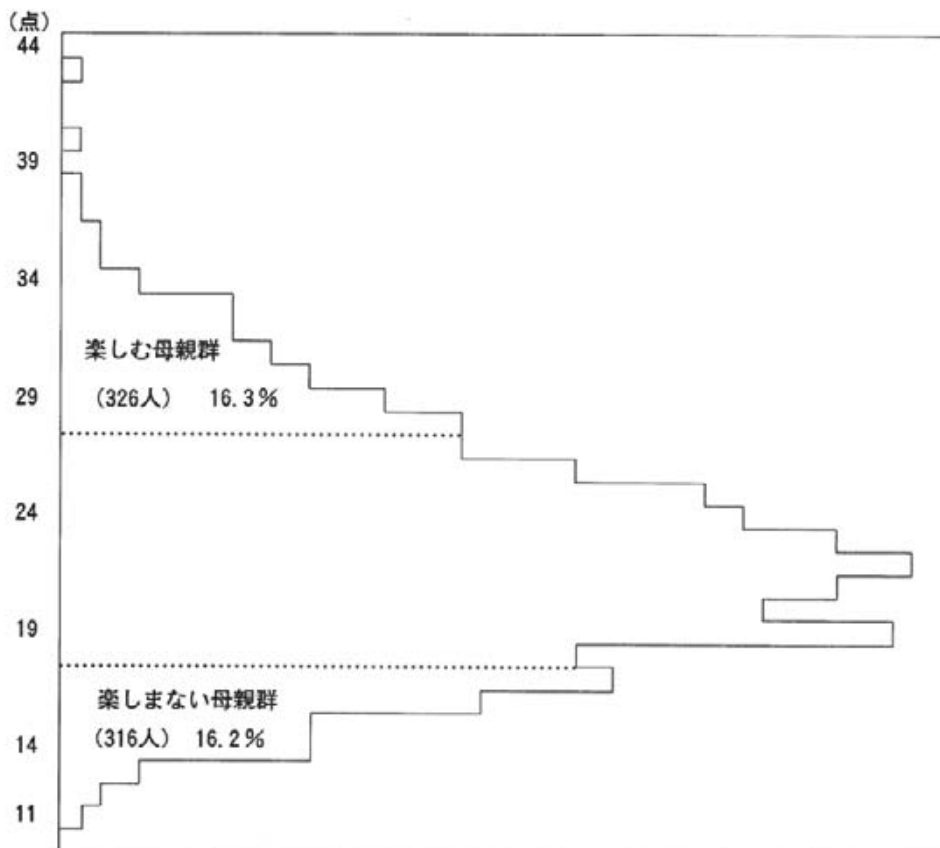
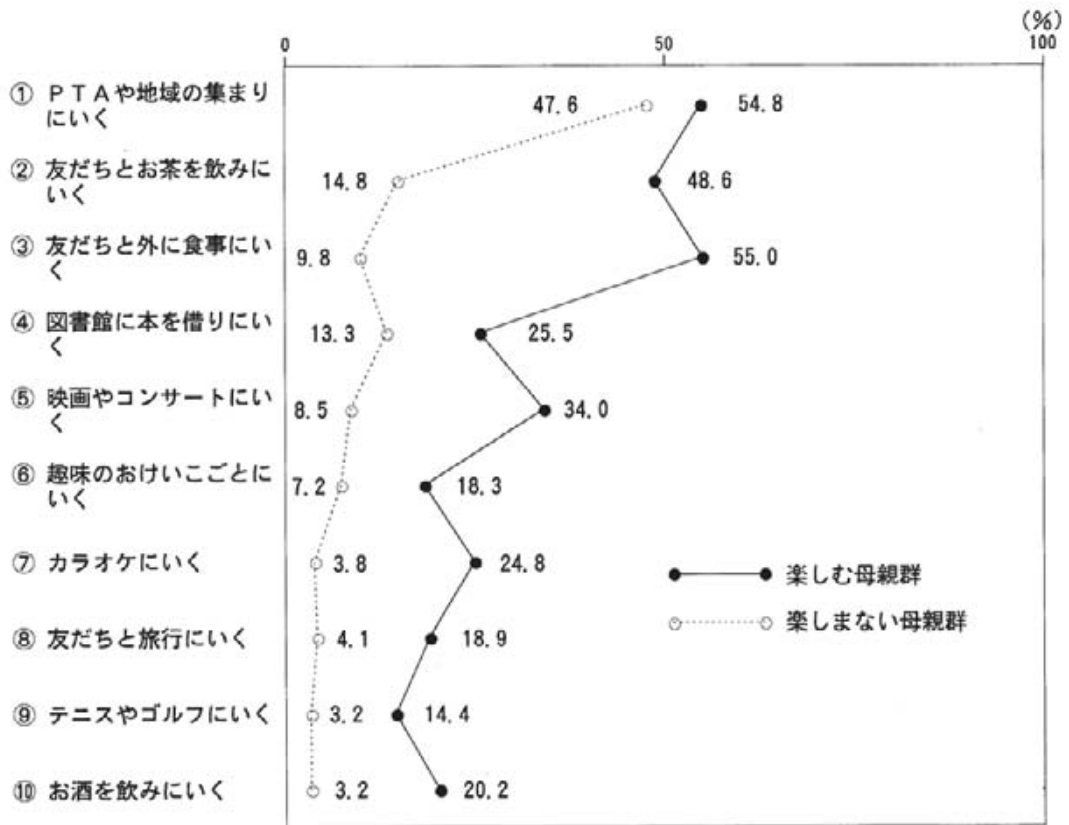


図52 母親の行動半径 × 母親のタイプ



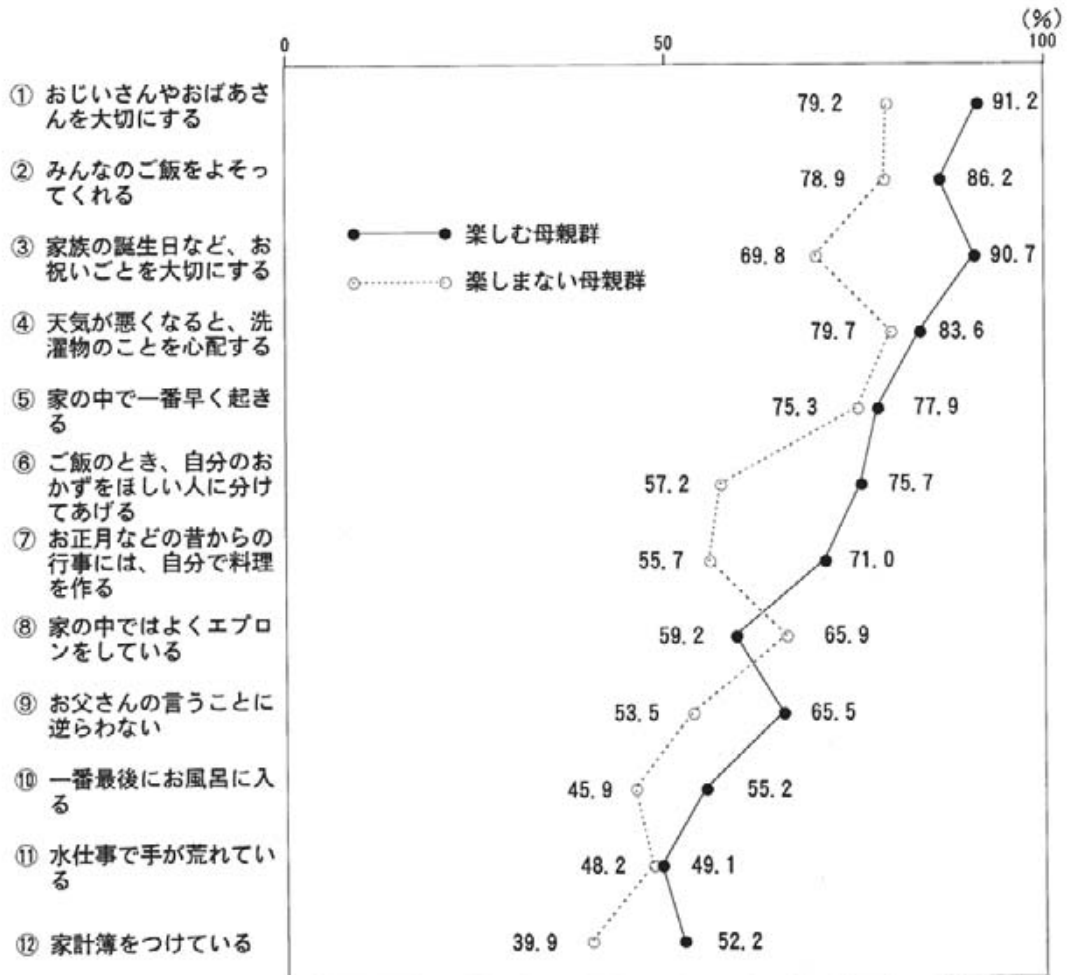
※数値は「よくいく」と「わりとよくいく」を加えたもの

表7 お母さんについて友だちに自慢できること × 母親のタイプ

			(%)
	楽しむ母親群	楽しまない母親群	全 体
① 仕事（家事）をがんばっている	76.3	> 67.2	72.4
② 料理が上手	63.6	> 43.3	51.4
③ 明るい	56.1	> 31.5	42.0
④ きれい好き	44.1	> 26.7	35.7
⑤ 編み物や手芸が上手	49.7	> 33.8	41.5
⑥ やさしい	28.1	> 18.7	21.6
⑦ いろいろなことを知っている	37.2	> 13.2	21.4
⑧ おしゃれ	33.2	> 2.6	13.6
⑨ けっこう美人	19.5	> 5.1	10.8
⑩ 英語が話せる	27.2	> 8.9	13.9
⑪ ワードプロやパソコンができる	33.1	> 1.9	14.8
⑫ スポーツが得意	21.5	> 6.1	10.3
⑬ ピアノなどの楽器が上手	18.0	> 5.4	12.3

※数値は「とてもそう」

図53 家族につくす × 母親のタイプ



※数値は「とてもよくあてはまる」と「わりとあてはまる」を加えたもの

● 「つくす母親」と「楽しむ母親」の両立)))

本章で取り上げた「つくす母親」と「楽しむ母親」イメージは、一見、対立する特性を持つ母親像であるかのように思われがちである。しかし、これまでのデータが示すように、今日の「つくす母親」たちは、ただひたむきに家族の世話をするのではなく、それなりに自分の生活をも楽しんでいるように見える。また、「楽しむ母親」たちも「つくす母親」ほどではないにせよ、けっこう家族の世話し、子どもからも評価されている。家族の世話もしながら、自分の生活を楽しむゆとりを持つこと、つまり「つくす」と「楽しむ」という2つの特性を自分の中に合わせ持つことは、この年齢の子どもを持つ母親たちにとって、今日、それほど難しいことではなくなっているのかもしれない。では、こうした両立を支える条件は、何なのであろうか。ここで

改めて、2つの合成点スケールより抽出された4つの群の母親たちの属性を見てみたい。

まず表8は、年齢構成をみたものである。表の上段のように、「家族につくす母親」は、どの年齢層でも一定の割合で見られるが、下段では、「生活を楽しむ母親」がやや若い層に多く見受けられる傾向がうかがえる。さらに表9では、母親のタイプと職業との関連をみようとしたが、比較的サンプル数がまとまっている専業主婦層、フルタイム層、パートタイム層についてみると、それぞれ若干の差がみとめられる。「つくす母親」群は、専業主婦に加え、パートタイマーや内職をする母親たちで支えられており、比較的家族と接する時間的ゆとりが持てる層である。一方、「生活を楽しむ母親」群は、フルタイムやパートタイムで働き、自分に比較的自由にな

表8 母親の年齢 × 母親のタイプ

	(%)				
	29歳以下	30～ 34歳	35～ 39歳	40～ 44歳	45歳以上
家族につくす母親群	0.4	22.6	47.2	26.2	3.6
つくさない母親群	0.4	21.6	44.7	27.5	5.8
生活を楽しむ母親群	1.8	28.7	43.4	23.7	2.4
楽しまない母親群	0.0	12.3	47.1	35.6	5.0
全 体	1.0	19.8	45.0	29.4	4.8

る経済的ゆとりを持つ層である。つまり、この時間的ゆとりと経済的ゆとりを合わせ持つことが、「つくす」と「楽しむ」を両立させる1つの条件と言えそうである。

次に表10を見よう。子どもから見た母親の幸せ度と母親のタイプとの関連では、「つくす母親」も「楽しむ母親」も、いずれも「とても幸せそう」の数字が高い。つくさない、楽しまない母親たちは、子どもから幸せ度のやや低い状態としてとらえられていることがわかる。楽しむタイプの母親が幸せ度の高いものであることは想像できるが、すでにふれてきたように、「つくし型」の母親も、昔の

ような100%の滅私奉公、自己犠牲の人生でなく、ゆとりを持った「つくし型」が可能になった時代の到来を思わせる。

ここで、最後に、もうひとつデータを見てみる。表11は、子どもから見た父親の家事・育児への協力度である。「つくす母親」群でも「楽しむ母親」群でも、もう一方の群に比べ、かなり協力的な夫たちの姿が浮かぶ。日常的ではないにしろ、「お母さんをサポートするだろう」と子どもたちが評価するだけの日頃の夫婦関係が基盤にあるに違いない。こうした家族の支えがやはり大切な両立の条件であるように思われる。

表9 母親の職業 × 母親のタイプ

(%)

	専業主婦	フルタイム	パートタイム	内職	自営業	農業	その他
家族につくす母親群	27.0	20.3	21.6	10.8	6.2	3.3	10.8
つくさない母親群	19.9	33.3	14.5	8.7	6.2	1.1	16.3
生活を楽しむ母親群	21.2	30.1	18.3	5.1	8.0	0.6	16.7
楽しまない母親群	30.8	22.0	13.8	9.5	7.5	4.3	12.1
全体	26.4	27.5	15.5	8.9	7.0	2.1	12.6

表10 お母さんの幸せ度 × 母親のタイプ

	幸せそう		幸せそうでない	
	とても	わりと	あまり	ぜんぜん
家族につくす母親群	59.0	33.1	5.5	2.4
つくさない母親群	17.0	53.3	22.6	7.1
生活を楽しむ母親群	45.1	40.2	10.1	4.6
楽しまない母親群	27.2	51.7	17.3	3.8
全 体	35.1	49.7	12.4	2.8

(%)

表11 お父さんとの協力体制 × 母親のタイプ

お母さんが病気やけがのとき					
	つくす 母親群	つくさない 母親群	楽しむ 母親群	楽しまない 母親群	全 体
① いつもより早く帰ってくる	70.2	> 41.6	64.0	> 43.3	55.2
② 夕食の支度をする	67.1	> 36.7	62.2	> 45.1	52.8
③ 買い物をする	61.4	> 36.7	61.4	≧ 25.7	50.3
④ 掃除をする	55.3	> 22.4	48.1	> 29.3	38.2
⑤ 洗濯をする	45.0	> 26.5	44.9	40.6	34.0

(%)

※数値は「よくする」と「わりとする」を加えたもの

お母さんの帰りが遅いとき					
	つくす 母親群	つくさない 母親群	楽しむ 母親群	楽しまない 母親群	全 体
① 子どもの世話をする	49.6	> 25.6	45.3	> 28.0	36.1
② お風呂をわかす	40.6	> 24.9	40.2	> 24.4	34.0
③ 夕食の支度をする	37.4	> 23.7	42.0	> 20.0	29.3
④ いつもより早く帰ってくる	33.0	> 16.3	37.4	> 15.8	26.9

(%)

※数値は「よくする」と「わりとする」を加えたもの

■

まとめに代えて

—「シフト型」の母親のライフスタイル—

子どもは、本来自己中心的な存在である。だから彼らは正直なところ、「いつも自分のそばにいて、何かとために世話をしてくれる」母親を求めており、本調査でも、こうした傾向がよく表れていた。そうした子どもの要求をある程度満たしていくことは、母親に荷せられた役割であろう。

しかし、他方で、母親自身も常に人間として、女性として満たされた自分でありたいと願う存在であることも忘れてはならない。とくに、母親役割の重さは、加齢と共に変わっていくものであるだけに、それは誰もが引き受けていかなければならない課題とも言えるだろう。子どもの要求にもある程度応えながら、バランスを壊さない程度に自分の生き方も大切にしていく。難しい課題ではあるが、今多くの母親たちはその方法を模索し始めている。そして、そのバランスをうまくとっている人々も次第に増加しつつあるように思われる。

子どもの成長と共に、1人の母親の中では、

次第に「つくす母親」役割が軽減され、自己啓発や社会参加のためのゆとりが生まれていく。

父親の中にみられた新しい時代の父親像マルチ・タイプ型は、母親の場合「シフト型」を新しい母親像として見いだすことができるかもしれない。子どもが幼いうちは「つくし型」の部分を大きく保ち、その割合を次第に減じ「生活を楽しむ型」の部分をふやしていく。家族も歳月（形成されてからの）と共に次第に母親（もしくは父親）への依存を弱めていき、または積極的にシフトを支援する。上手にシフトができるようになるには、若いうちから1人の母親の中に「つくし型」と「生活を楽しむ型」の両存が必要であり、ただウエイトのかけ方に工夫がいるのかもしれない。そうしたシフトが、家族や社会の支援体制でうまく行われるように人びとの意識改革と支援のシステム作りの両方が求められる時代が来ているように思われる。